



71  
600



始





71-600



涓

滴

森  
林  
太  
郎  
作

■ 代  
表  
的  
名  
作  
選  
集

(38)

京 東  
社 潮 新  
版 出

大 正  
12. 4. 9  
内 交



解題

本書は明治四十三年、同じく「涓滴」と題し、同じき内容を以て新潮社より發刊せられたもので、明治四十年代の初め、作者が久しく絶つてゐた創作の筆をとり、その絶倫の精力を驅つて、矢繼早に多くの作を公にしてゐた頃の集である。當時、自然主義の全盛時代にあつて、別に一個の堅壘を文壇の一角に擁し、一種の高踏的態度を以て、輕妙な筆を行つてゐた頃の作者の姿を見る可く、而して、短篇作家としての鷗外の全面目は、これに盡きると云つても過言では無からう。就中、「あそび」の一篇の如きは、作者自身の生活態度を直叙したといふ點で、いろ／＼の意味から世評に上つた作である。

編輯者識



# 欠

## 次 目

杯	花	獨	棧	あ	普	木	大	電	追	懇	牛	里芋の芽と不動の目	ル・バルナス・アンピュラン
子	身	橋	び	中	精	見	窓	窓	難	會	鍋		
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二	二	三	四	五	七	八	八	一〇	一五	一五	一五	一三	一四



# 欠

「早く入らつしやいよ。いつでもあなたは遅れるのね。早くよ。」

「待つて入らつしやいよ。石がごろ／＼してゐて歩きにくいのですもの。」

後れ先立つ娘の子の、同じやうな洗髪を結んだ、眞赤な、幅の廣いリボンが、ひらく／＼と蝶が群れて飛ぶやうに見えて来る。

これもお揃の、藍色の勝つた湯帷子の袖が翻る。足に穿いてゐるのも、お揃の、赤い端緒の草履である。

「わたし一番よ。」

「あら。ずるいわ。」

先を争うて泉の傍に寄る。七人である。

年は皆十一二位に見える。きやうだいにしては、餘り粒が揃つてゐる。

皆美しく、稍くなまめかしい。お友達であらう。

この七顆の珊瑚の珠を貫くのは何の緒か。誰が連れて温泉宿には來てゐるのだらう。

漂ふ白雲の間を漏れて、木々の梢を今一度漏れて、朝日の光が荒い縞のやうに泉の畔に差す。

眞赤なりボンの幾つかが燃える。



娘の一人が口に銜んでゐる丹波酸漿を膨らませて出して、泉の眞中に投げた。

凸面をなして、盛り上げたやうになつてゐる水の上に投げた。

酸漿は二三度くるくくと廻つて、井桁の外へ流れ落ちた。

「あら。直ぐにおつこつてしまふのね。わたしどうなるかと思つて、楽しみにして遣つて見たの  
だわ。」

「そりやおつこちるわ。」

「おつこちるといふことが前から分つてゐて。」

「分つてゐてよ。」

「嘘ばつかし。」

打つ眞似をする。藍染の湯帷子の袖が翻る。

「早く飲みませう。」

「さうく。飲みに来たのだつたわ。」

「忘れてゐたの。」

「え。」



「まあ、いやだ。」

手ん手に懷を搜つて杯を取り出した。

青白い光が七本の手から流れる。

皆銀の杯である。大きな銀の杯である。

日が丁度一ぱいに差して来て、七つの杯はいよく輝く。七條の銀の蛇が泉を繞つて奔る。

銀の杯はお揃で、どれにも二字の銘がある。

それは自然の二字である。

妙な字體で書いてある。何か據かりこみがあつて書いたものか。それとも獨創の文字か。

かはるがはる泉を汲んで飲む。

濃い紅の脣を尖らせ、桃色の頬を膨らませて飲むのである。

木立のところどころで、じいじいといふ聲がする。蟬が聲を試みるのである。

白い雲が散つてしまつて、日盛りになつたら、山をゆする聲になるのであらう。

この時只一人坂道を登つて来て、七人の娘の背後に立つてゐる娘がある。

第八の娘である。



背は七人の娘より高い。十四五になつてゐるのであらう。  
黄金色の髪を黒いリボンで結んである。  
琥珀のやうな顔から、サントオレアの花のやうな青い目が覗いてゐる。永遠の驚を以て自然  
を覗いてゐる。

脣丈がほのかに赤い。

黒の縁を取つた鼠色の洋服を着てゐる。

東洋で生れた西洋人の子か。それとも相の子か。

第八の娘は裳のかくしから杯を出した。

小さい杯である。

どこの陶器か。火の坑から流れ出た熔巖の冷めたやうな色をしてゐる。

七人の娘は飲んでしまつた。杯を漬けた迹のコンサントリックな圈が泉の面に消えた。

凸面をなして、盛り上げたやうになつてゐる泉の面に消えた。

第八の娘は、藍染の湯帷子の袖と袖との間をわけて、井桁の傍に進み寄つた。

七人の娘は、この時始てこの平和の破壊者のあるのを知つた。

そしてその琥珀いろの手に持つてゐる、黒ずんだ、小さい杯を見た。

思ひ掛けない事である。

七つの濃い紅の脣は開いた儘で詞がない。

蟬はじいじいと鳴いてゐる。

良久しい間、只蟬の聲がするばかりであつた。

一人の娘がやうやうの事でかう云つた。

「お前さんも飲むの。」

聲は訝に少しの嗔を帯びてゐた。

第八の娘は黙つて頷いた。

今一人の娘がかう云つた。

「お前さんの杯は妙な杯ね。一寸拜見。」

聲は訝に少しの侮を帯びてゐた。

第八の娘は黙つて、その熔巖の色をした杯を出した。

小さい杯は琥珀いろの手の、臆ばかりから出来てゐるやうな指を離れて、薄紅のむつくりし



た、一つの手から他の手に渡つた。

「まあ、變にくすんだ色だこと。」

「これでも瀬戸物でせうか。」

「石ぢやあないの。」

「火事場の灰の中から拾つて來たやうな物なのね。」

「墓の中から掘り出したやうだわ。」

「墓の中は好かつたね。」

七つの喉から銀の鈴を振るやうな笑聲が出た。

第八の娘は兩臂を自然の重みで垂れて、サントオレアの花のやうな目は只ぢいつと空を見てゐる。

一人の娘が又かう云つた。

「馬鹿に小さいのね。」

今一人が云つた。

「さうね。こんな物ぢやあ飲まれはしないわ。」

# 欠



# 欠

いつか カンボヂヤ Kambodscha の酋長が巴里に滞在してゐた頃、それが連れて来てゐた踊子を見て、  
織く長い手足の、しなやかな運動に、人を迷はせるやうな、一種の趣のあるのを感じたことがあ  
る。その時急いで取つた デザイン Designs が今も残つてゐるのである。さういふ風に、どの人種にも美  
しい處がある、それを見附ける人の目次第で美しい處があると信じてゐるロダンは、此間から  
花子といふ日本の女が ワリエテエ Variete に出でゐるといふことを聞いて、それを連れて来て見せてくれ  
るやうに、傳を求めて、花子を買つて出してゐる男に頼んで置いたのである。

今來たのはその興行師である。 アンプレサリオ Impresario である。

「こつちへ這入らせて下さい」とロダンは云つた。椅子をも指さないのは、その暇がないから  
ばかりではない。

「通譯をする人が一しよに來てゐますが。」機嫌を伺ふやうに云ふのである。

「それは誰ですか。フランス人ですか。」

「いゝえ。日本人です。」 ランステチユウ Institut Pasteur バストヨール で爲事をしてゐる學生ですが、先生の所へ呼ばれ

たといふことを花子に聞いて、望んで通譯をしに來たのです。」

「宜しい。一しよに這入らせて下さい。」



興行師は承知して出て行つた。

直ぐに男女の日本人が這入つて來た。二人共際立つて小さく見える。跡に附いて這入つて戸を締める興行師も、大きい男ではないのに、二人の日本人はその男の耳までしかないのである。

ロダンの目は注意して物を視るとき、内背に深く刻んだやうな皺が出来る。この時その皺が出來た。視線は學生から花子に移つて、そこに暫く留まつてゐる。

學生は挨拶をして、ロダンの出した、踵の一本一本浮いてゐる右の手を握つた。La Danatide や Le Kaiser や Le Penseur を作つた手を握つた。そして名刺入から、醫學士久保田某と書いた名刺を出してわたした。

ロダンは名刺を一寸見て云つた。「ランスチチュウ・バストヨオルで爲事をしてゐるのですか。」

「そうです。」

「もう長くゐますか。」

「三箇月になります。」

「アムユツケ マントラワーヒ  
「Avez-vous bien travaillé?」

學生ははつと思つた。ロダンといふ人が口癖のやうに云ふ詞だと、兼て噂に聞いてゐた、その簡単な詞が今自分に對して發せられたのである。

「Oui, beaucoup, Monsieur!」と答へると同時に、久保田はこれから生涯勉強しようと、神明に誓つたやうな心持がしたのである。

久保田は花子を紹介した。ロダンは花子の小さい、締まつた體を、無恰好に結つた高島田の巖から、白足袋に千代田草履を穿いた足の尖まで、一目に領略するやうな見方をして、小さい巖疊な手を握つた。

久保田の心は一種の羞恥を覺えることを禁じ得なかつた。日本の女としてロダんに紹介するには、もう少し立派な女が欲しかつたと思つたのである。

さう思つたのも無理は無い。花子は別品ではないのである。日本の女優だと云つて、或時忽然ヨオロッパの都會に現れた。そんな女優が日本にゐたかどうだか、日本人には知つたものはない。久保田も勿論知らないのである。しかもそれが別品でない。お三どんのやうだと云つては、可哀さうであらう。格別荒い爲事をしたことはないと見えて、手足なんぞは荒れてゐない。併し十七の娘盛なのに、小間使としても少し受け取りにくい姿である。一言で評すれば、子守



あがり位にしか、値踏が出来兼ねるのである。

意外にもロダンの顔には満足の色が見えてゐる。健康で餘り安逸を貪つたことの無い花子の、些の脂肪をも貯へてゐない、薄い皮膚の底に、適度の勞働によつて好く發育した、緊張力のあつた筋肉が、額と腮の詰まつた、短い顔、あらはに見えてゐる頸、手袋をしない手と腕に躍動してゐるのが、ロダンには氣に入つたのである。

ロダンの差し伸べた手を、もう大分ヨオロッパ慣れてゐる花子は、愛相の好い微笑を顔に見せて握つた。

ロダンは二人に椅子を侷めた。そして興行師に、「少し應接所で待つてゐて下さい」と云つた。興行師の出で行つた跡で、二人は腰を掛けた。

ロダンは久保田の前に烟草の箱を開けて出しながら、花子に、「マドモアセユの故郷には山がありますか、海がありますか」と云つた。

花子はこんな世渡をする女の常として、いつも人に問はれるときに話す、極まつた、ステレオタイプな身の上話がある。丁度あの Zola の Lourdes で、汽車の中に乗り込んでゐて、足の創の直つた靈驗を話す小娘の話のやうなものである。度々同じ事を話すので、次第に修行が詰んで、

ルウチニス routine のある小説家の書く文章のやうになつてゐる。ロダンの不用意な問は幸にも此腹巻を破つてしまつた。

「山は遠うございます。海はぢき傍にございます。」

答はロダンの氣に入つた。

「度々舟に乗りましたか。」

「乗りました。」

「自分で漕ぎましたか。」

「まだ小さかつたから、自分で漕いだことはございません。父が漕ぎました。」

ロダンの空想には晝が浮かんだ。そして暫く黙つてゐた。ロダンは黙る人である。

ロダンは何の過渡もなしに、久保田にかう云つた。「マドモアセユはわたしの職業を知つてゐるでせう。着物を脱ぐでせうか。」

久保田は暫く考へた。外の人の爲めになら、同國の女を裸體にする取次は無論しない。併しロダンが爲めには厭はない。それは何も考へることを要せない。只花子がどう云ふだらうかと思つたのである。



「兎に角話して見ませう。」  
「どうぞ。」

久保田は花子にかう云つた。「少し先生が相談があると云ふのだがね。先生が世界に又とない彫物師で、人の體を彫る人だといふことは、お前も知つてゐるだらう。そこで相談があるのだ。一寸裸になつて見せては貰はれまいかと云つてゐるのだ。どうだらう。お前も見通る、先生はこんなお爺いさんだ。もう今に七十に間もないお方だ。それにお前の見る通りの眞面目なお方だ。どうだらう。」

かう云つて、久保田はちつと花子の顔を見てゐる。はにかむか、氣取るか、苦情を言ふかと思ふのである。

「わたしなりますわ。」きさくに、さつぱりと答へた。

「承諾しました」と、久保田がロダンに告げた。

ロダンの顔は喜にかゞやいた。そして椅子から起ち上がつて、紙とチヨオクとを出して、卓の上に置きながら、久保田に言つた。「ここにゐますか。」

「わたくしの職業にも同じ必要に遭遇することはあるのです。併しマドモアセユの爲めに不愉快でせう。」

「さうですか。十五分か二十分で済みますから、あそこの書籍室へでも行つてみて下さい。葉巻でも付けて。」ロダンは一方の戸口を指さした。

「十五分か二十分で済むさうです」と、花子に言つて置いて、久保田は葉巻に火を付けて、教へられた戸の奥に隠れた。

\* \* \* \* \*

久保田の這入つた、小さい一間は、相對してゐる兩側に戸口があつて、窓は只一つある。その窓の前に粧飾のない卓が一つ置いてある。窓に向き合つた壁と、其兩翼になつてゐる處とに本箱がある。

久保田は暫く立つて、本の背革の文字を讀んでゐた。わざと揃へたよりは、偶然集まつたと思はれる collection である。ロダンは生れ付き本好で、少年の時困窮して、Bruxelles の町をさまよつてゐた時から、始終本を手にしてゐたといふことである。古い汚れた本の中には、定めていろ／＼な記念のある本もあつて、わざ／＼ここへも持つて來てゐるのだらう。

葉巻の灰が崩れさうになつたので、久保田は卓に歩み寄つて、灰皿に灰を落した。



卓の上に置いてある本があるので、なんだらうと思つて手に取つて見た。

向うの窓の方に寄せて置いてある、古い、金縁の本は、聖書かと思つて開けて見ると、Divina Comediaの Edition de poche であつた。手前の方に斜に置いてある本を取つて見ると、Beaudelaire が全集のうちの一巻であつた。

別に讀まうといふ氣もなしに、最初のページを開けて見ると、おもちゃの形而上學といふ論文がある。何を書いてゐるかと思つて、ふいと讀み出した。

ポオドレエルが小さいとき、なんとかいふお嬢さんの所へ連れて行かれた。そのお嬢さんが部屋に一ばいおもちゃを持つてゐて、どれでも一つやらうと云つたといふ記念から書き出してある。

子供がおもちゃを持つて遊んで、暫くするときつとそれを壊して見ようとする。その物の背後に何物があるかと思ふ。おもちゃが動くおもちゃだと、それを動かす衝動の元を尋ねて見たくなるのである。子供は Physique より Metapsique に之くのである。理學より形而上學に之くのである。

僅か四五ページの文章なので、面白さに釣られてとう／＼讀んでしまつた。

其時戸をこつこつと叩く音がして、戸が開いた。ロダンが白髪頭をのぞけた。  
「許して下さい。退屈したでせう。」

「いゝえ、ポオドレエルを讀んでみました」と云ひながら、久保田は爲事場に出て來た。

花子はもうちやんと支度をしてゐる。

卓の上には esquisses が二枚出來てゐる。

「ポオドレエルの何を読みましたか。」

「おもちゃの形而上學です。」

「人の體も形が形として面白いのではありません。靈の鏡です。形の上に透き徹つて見える内の焰が面白いのです。」

久保田が遠慮げにエスキスを見ると、ロダンは云つた。「粗いから分かりますまい。」

暫くして又云つた。「マドモアセユは實に美しい體を持つてゐます。脂肪は少しもない。筋肉は一つ／＼浮いてゐる。 Extérieurs の筋肉のやうです。臆がしつかりしてゐて太いので、關節の大きさが手足の大きさと同じになつてゐます。足一本でいつまでも立つてゐて、も一つの足を直角に伸ばしてゐられる位、丈夫なのです。丁度地に根を深く卸してゐる木のやうなのです。」



肩と腰の潤い地中海の タイプ とも違ふ。腰ばかり潤くて、肩の狭い北ヨオロッパのタイプとも違ふ。強さの美ですね。」

獨 身

一

小倉の冬は多といふ程の事はない。西北の海から長門の一角を掠めて、寒い風が吹いて来て、蜜柑の木の枯葉を庭の砂の上に吹き落して、からからと音をさせて、庭のあちこちへ吹き遣つて、暫くおもちやにしてゐて、とうとう縁えんの下に吹き込んでしまふ。さういふ日が暮れると、どこの家でも宵のうちから戸を締めてしまふ。

外まへはいつか雪になる。をりをり足を刻んで駈けて通る傳便でんびんの鈴かねの音ねがする。

傳便と云つても餘所のものには分かるまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられてゐる二つの風俗の一つである。常磐橋の袂に圓い柱が立つてゐる。これに広告を貼り附けるのである。赤や青や黄な紙に、大きい文字だの、あらい筆使ひの畫だのを書いて、新らしく開けた店の廣告、それから芝居見せものなどの興行の廣告をするのである。



勿論柱は只一本丈であつて、これに張ると、大門町の石垣に張る位より外に、廣告の必要はない土地なのだから、印刷したものより書いたものの方が多い。晝だつても、巴里の町で見る *Affiche* のやうに氣の利いたのではない。併し兎に角廣告柱がある丈はえらい。これが一つ。

今一つが傳便なのである。 *Heinrich von Stephan* が警察國に生れて、巧に郵便の網を天下に布いてから、手紙の往復に不便はない筈ではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用辨の事である。一日の間の時を以て算する用辨を達するには、郵便は間に合はない。 *Rendez-vous* をしたつて、明日何處で逢はうなら、郵便で用が足る。併し性急な戀で、今晚何處で逢はうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏を割く嫌がある。その上嚴めしい配達の方 *が殺風景である。さういふ時には走使が欲しいに違ない。會社の徽章の附いた帽を被つて、辻々に立つてゐる、手紙を市内へ届けることでも、途中で買つて邪魔になるものを自宅へ持つて歸らせる事でも、何でも受け合ふのが傳便である。手紙や品物と引換に、會社の印の据わつてゐる紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で傳便と云つてゐるのが、この走使である。*

傳便の講釋がつひ長くなつた。小倉の雪の夜に、戸の外の靜かな時、その傳便の鈴の音がち

りん、ちりん、ちりん、ちりんと急調に聞えるのである。

それから優しい女の聲で、「かりかあかりか、どつこいさのさ」と、節を附けて呼んで通るのが聞える。植物採集に持つて行くやうな、ブリキの入物に花欄糖を入れて肩に掛けて、小提灯を持つて賣つて歩くのである。

傳便や花欄糖賣は、いつの時候にも來るのであるが、夏は辻占賣なんぞの方が耳に附いて、傳便の鈴の音、花欄糖賣の女の聲は氣に留まらないのである。

こんな晩には置炬燵をする人もあらう。併し實はそれ程寒くはない。

翌朝手水鉢に氷が張つてゐる。此氷が二日より長く續いて張ることは先づ少い。遅くも三日目には風が變る。雪も氷も融けてしまふのである。

## 二

小倉の雪の夜の事であつた。

新魚町の大野豊の家に二人の客が落ち合つた。一人は裁判所長の戸川といふ胡麻鹽頭の男である。一人は富田といふ市病院長で、東京大學を卒業してから、此土地へ來て洋行の費用を貯



へてゐるのである。費用も大概出来たので、近いうちに北川といふ若い醫學士に跡を譲つて、出發すると云つてゐる。富田院長も四十は越してゐるが、まだ五分刈頭に白い筋も交らない。酒好だといふことが一寸見ても知れる、太つた赭色の男である。

極端な獨身生活をしてゐる主人は、下女の竹に饅頭の玉を買つて來させて、臺所で煮させて、二人に酒を出した。此家では茶を煮るときは、名物の鶴の子より旨いといふので、焼芋を買はせる。常磐橋の辻から、京町へ曲がる角に釜を据ゑて、手拭を被つた爺いさんが、「ほつこり、ほつこり焼立ほつこり」と呼んで賣つてゐるのである。酒は自分では飲まないが、心易い友達に飲ませるときは、好きな饅頭を買はせる。これも焼芋の釜の据ゑてある角から二三軒目で、色の褪めた紺暖簾に、文六と染め抜いてある家へ買ひに遣るのである。

主人は饅頭丈相伴して、無頓着らしい顔に笑を湛へながら、二人の酒を飲むのを見てゐる。話はしめやかである。只富田の笑ふ聲がをり／＼全體の調子を破つて高くなる。この邊は旭町の遊廓が近いので、三味や太鼓の音もするが、餘程鈍く微かになつて聞えるから、うるさくない。

竹が臺所から出て來て、饅頭の代りを勤めると、富田が手を揮つて云つた。

「もう行けない。饅頭はもう御免だ。此家にも奥さんがあれば、僕は黙つて饅頭で酒なんぞは飲まないのだが。」

これが口火になつて、有妻無妻といふ議論が燃え上がった。此部屋で此等の人の口から此議論が出たのは、決して今夜が初めではない。

主人が帝國探炭會社の理事長になつて小倉に來てから、もう二年立つた。その内大野の獨身生活は小倉で名高いものになつてゐて、随つて度々問題に上る。

主人は全く女といふものなしに暮らしてゐるのだらうか。富田も此問題の爲めに頭を悩ました一人である。そこでかう云つた。

「どうも小倉には御主人のお目に留まつたものがなさうだ。多分馬關だらうと思つて、僕は随分熱心に聞いて廻つたのだが、結果が陰性だつた。」

「随分御苦勞なわけだね」と、遠慮深い戸川は主人の顔を見て云つた。

主人は只にやりやり笑つてゐる。

富田は少し酔つてゐるので、論鋒がいよいよ主人に向いて來る。「一體こゝの御主人のやうな生活をしてゐられては、周囲の女の爲めに危険で行けない。」



「なぜだい、君。」

「いつどの女とどう云ふ事が始まるかも知れないんだからね。」

「丸で僕が Don Juan でもあるやうだ。」

戸川は主人の爲めに氣の毒に思つて、半ば無意識に話を外へ轉じようとした。そして持前のしんねりむつりした様子で、妙な話をし出した。

三

戸川は両手を火鉢に翳して、背中を圓くして話すのである。

「そりやあ獨身生活といふものは、大抵の人間には無難に爲遂げにくいには違ない。僕の同期生に宮澤といふ男がゐた。その男の卒業して直ぐの任地が新發田だったのだ。御承知のやうな土地柄だらう。裁判所の近處に、小さい借屋をして、下女を一人使つてゐた。同僚が妻を持つてと勸めても、どうしても持たない。なぜだらう、なぜだらうと云ふうちに、いつかあれは吝嗇なのだといふことに極まつてしまつたさうだ。僕は書生の時から知つてゐたが、吝嗇ではなかつた。意地強く金を溜めようなどといふ風の男ではない。萬事控目で踏み切つたことが出来ない。

そこで判事試補の月給では妻子は養はれないと、一圖に思つてゐたのだらう。土地が土地なので、丁度今夜のやうな雪の夜が幾日も幾日も續く。宮澤はひとり部屋に閉ぢ籠つて本を讀んでゐる。下女は壁一重隔てた隣の部屋で縫物をしてゐる。宮澤が欠をする。下女が欠を噛み殺す。さういふ風で大分の間過ぎたのださうだ。そのうち或晩風雪になつて、雨戸の外では風の音がひゆうひゆうとして、庭に植ゑてある竹がをりをり帚で掃くやうに戸を摩る。十時頃に下女が茶を入れて持つて来て、どうもひどい晩でございますねといふやうな事を言つて、暫くもぢもぢしてゐた。宮澤は自分が寂しくてたまらないので、下女もさぞ寂しからうと思ひ遣つて、どうだね、針爲事をこつちへ持つて来ては、己は構はないからと云つたさうだ。さうすると下女が喜んで縫物を持つて来て部屋の隅の方で小さくなつて爲事をし始めた。それからは下女が、もうお客様もございますまいねと云つて、をりをり縫物を持つて、宮澤の部屋へ来るやうになつたのだ。」

富田は笑ひ出した。「戸川君。君は小説家だね。なかなか旨い。」

戸川も笑つて頭を掻いた。「いや。實は宮澤が後悔して、僕にあんまり精しく話したもんだから、僕の話もつひ精しくなつたのだ。跡は端折つて話すよ。併しも一つ具體的に話したい事が



ある。それはかうなのだ。下女が或晩、お休なさいと云つて、隣の間へ引き下がつてから、宮澤が寐られないでゐると、壁を隔てて下女が溜息をしては寢返りをするのが聞える。暫く聞いてゐると、その溜息が段々大きくなつて、苦痛の爲めに呻吟するといふやうな風になつたさうだ。そこで宮澤がつひ、どうかしたのかと云つた。これ丈話してしまへば跡は本當に端折るよ。」

富田は迎山な聲をした。「おい待つてくれ給へ。序に跡も端折らないで話し給へ。なかなか面白いから。」聲を一倍大きくした。「おい。お竹さん。好く聞いて置くが好いぜ。」

始終にやにや笑つてゐた主人の大野が顔を蹙めた。

戸川は話し續けた。「どうも富田君は交つ返すから困る。兎に角それから下女が下女でなくなつた。宮澤は直ぐに後悔した。職務が職務なのだから、發覺しては一大事だと思つたといふことは、僕にも察せられる。ところが、下女は今まで包ましくしてゐたのが、次第にお化粧をする、派手な着物を着る。なんとなく人の目に立つ。宮澤は氣が氣でない。とうとう下女の親許へ出掛けて行つて、いづれ妻にするからと云つて、一旦引き取らせて手當を遣つた。そのうちはどうかしよと思つたが、親許が眞面目なので、どうすることも出来ない。宮澤は随分窮してはゐるのだが、ひと算段をしてでも金で手を切らうとした。併し親許では極まつた手當の外の

ものはどうしても取らない。それが心から欲しくないのだから、手が附けられない。とうとうその下女を妻にして、今でもその儘になつてゐる。今は東京で立派にしてゐるのだが、なんにしる教育の無い女の事だから、宮澤は何かに附けて困つてゐるよ。」

富田は意地きたなげに、酒をちびちび飲みながら冷かした。「もうおしまひか。龍頭蛇尾だね。そんな話なら、譽めなけりやあ好かつた。」

#### 四

この時戸口で、足踏をして足駄の齒に附いた雪を落すやうな音がする。主人の飼つてゐるワンといふ犬が吠えさうにして廢して、鼻をくくんくと鳴らす。竹が障子を開けて何か言ふ聲がする。

間もなく香染の衣を着た坊さんが、鬚の二分程延びた顔をして這入つて來た。皆の顔を見て會釋して、「遅くなりまして甚だ」と云ひながら、疊んだ坐具を右の脇に置いて、戸川と富田との間の處に据わつた。

寧國寺さんといふ曹洞宗の坊さんなのである。金田町の鐵道線路に近い處に、長い間廢寺の



やうになつてゐた寧國寺といふ寺がある。檀家であつた元小倉藩の士族が大方豊津へ遷つてしまつたので、廢寺のやうになつたのであつた。辻堂を大きくしたやうな此寺の本堂の壁に、新聞反古を張つて、この坊さんが近頃住まつてゐるのである。

主人は嬉しさうな顔をして、下女を呼んで言ひ附けた。

「餛飩がまだあるなら、一杯熱くして寧國寺さんに上げないか。お寒いだらうから。」

戸川は自分の手を翳してゐた火鉢を、寧國寺さんの前へ押し遣つた。

寧國寺さんは殆ど無間斷むげんだんに微笑を漙へてゐる、瘦せた顔を主人の方に向けて、こんな話をし出した。

「實は今朝托鉢に出ますと、豎町の小さい古本屋に、大智度論の立派な本が一山積み疊ねてあるのが、目に留まつたのですな。どうもこんな本が端本になつてゐるのは不思議だと思ひながら、こちらの方へ歩いて参つて、綿町の通を且過橋たぐわはしの方へ行く途中で、又古本屋の店を見ると、同じ大智度論が一山こゝにも積み疊ねてある。その外法苑辭林だの何だのと、色々あるのです。大智度論も二軒のを合せると全部になりさうなのですな。」

主人は口を挟んだ。「それぢやあ態と端本にして分けて賣つたのでせう。」

「お察しの通りです。どこから出たといふことも大概分つてゐます。どうかすると調べたくなる事もある本ではあるし、端本にして置けば、反古にしてしまはれるのは極まつてゐますから、いかにも惜しうございますので、東禪寺の和尚に話して買うて置いて貰ふことにして來ました。跡に残つてゐる本のうちには、何か御覧になるやうなものもあらうかと思ひましたので一寸お知らせに参りました。」

「それは有難う。明日役所から歸る時にも廻つて見ませう。さあ。餛飩が冷えます。」

寧國寺さんは餛飩を食べるのである。暫くすると、竹が「お代りは」と云つて出て來た。そしてお代りを持つて來るのを待つて、主人は竹を呼び留めた。

「少し此處を片附けて、お茶を入れて、馬關の羊羹のあつたのを切つて來い。おい。富田君の處の徳利は片附けては行けない。」

「いや。これを持つて行かれては大變。」富田は鰻のやうになつた手で徳利を押しへた。そして主人にかう云つた。

「一體御主人の博聞強記は好いが、科學を遣つてゐる癖に佛法の本なんかを讀むのは分からないて。佛法の本は坊様が讀めば好いではないか。」



寧國寺さんは餛飩をゆつくり食べながら、顔には相變らず微笑を湛へてゐる。

主人がかう云つた。「君がさう思ふのも無理はない。醫書なんぞは、醫者でないものが讀むと、役には立たないで害になることもある。併し佛法の本は違ふよ。」

「どうか知らん。獨身でゐるさへ變なのに、お負に三寶に歸依してゐると來るから、溜まらな  
い。」

「又獨身攻撃を遣り出すね。僕なんぞの考では、さう云ふ君だつてやつぱり三寶に歸依してゐるよ。」

「かう見えても、僕なんかは三寶とは何と何だか知らないのだ。」

「知らないでも歸依してゐる。」

「そんな堅白異同の辯を試みたつて行けない。」

主人は笑談のやうな、眞面目のやうな、不得要領な顔をしてこんな事を言つた。

「さうでないよ。君は科學科學と云つてゐるだらう。あれも法なのだ。君達の仲間で崇拜してゐる大先生があるだらう。 アウトリテエテン Authoritäten だね。あれは皆佛なのだ。そして君達は皆僧なのだ。それからどうかすると先生を退治しようとするねえ。 アウトリテエテン スチユルノライ Authoritäten-Stürmer といふのだね。あ

れは佛を呵し祖を罵るのだね。」

寧國寺さんは羊羹を食べて茶を喫みながら、相變らず微笑してゐる。

五

富田は目を据ゑて主人を見た。

「又お講釋だ。ちよいと話をしてゐる間にでも、おや、又教へられたなと思ふ。あれが苦痛だね。」一寸顔を覺めて話し續けた。

「なる程酒は御馳走になる。併しお肴が餛飩と來ては閉口する。お負にお講釋まで聞せられては溜まらない。」

主人はにやにや笑つてゐる。「一體佛法なぞを攻撃しはじめたのは誰だらう。」

「いや。説法さへ廢して貰はれば、僕も謗法はしない。だがね、君、獨身生活を攻撃することとは廢さないよ。箕村の處なんぞへ行くと、お肴が違ふ。お梅さんが床の間の前に据わつて、富田に馳走をせいと儼然として御託宣があるのだ。さうすると山海の美味が前に並ぶのだ。」

「分からないね。箕村といふのは誰だい。それにお梅さんといふ人はどうしてそんなに息張つ



てゐるのだい。」

「そりや息張つてゐますとも。床の間の前へ行つて据わると、それ、御託宣だと云ふので、箕村は遙か下がつて平伏するのだ。」

「箕村といふのは誰だい。」

「箕村ですか。あの長濱へ出る處に小兒科病院を開いてゐる男です。前の細君が病氣で亡くなつて忌中でゐると、或日大きな鯛を持つて来て置いて行つたものがあつたさうだ。箕村がひどく驚いて、近所を聞き廻つたり何かして騒ぐと、その時はまだ女中でゐたお梅さんが平氣で、これはお稻荷様の下さつた鯛だと云つて、直ぐに料理をして、否唯なしに箕村に食はせたさうだ。それが不思議の始で、をりをり稻荷の託宣がある。梅と婚禮をせいと云ふ託宣なんぞも、やつぱりお梅さんが言ひ渡して置いて、箕村が婚禮の支度をする時、お梅さんは驚いた顔をして、お梅さんはどちらからお出なさいますと云つたさうだ。僕は神慮に稱つてゐると見えて、富田に馳走をせいと云ふ託宣があるのだ。」

「怪しい女だね。」と戸川が嘴を容れた。

「なに。御馳走になるから云ふのではないが、なかなか好い細君だよ。入院してゐる子供は皆

懐いてゐる。好く世話をして遣るさうだ。只をりをり御託宣があるのだ。」

寧國寺さんは、主人と顔を見合せて、不斷の微笑を浮べて聞いてゐたが、「お休なさい」と云つて、ついと起つた。見送りに立つ暇もない。

この坊さんはいつても飄然として來て飄然として去るのである。

風の音がひゆうと云ふ。竹が薬籠を持つて、急須に湯を差しに來て、「上はすつかり晴れました」と云つた。

「もうお互に歸らうぢやないか」と戸川が云つた。

富田は幅の廣い顔に幅の廣い笑を見せた。「ところが、まだなかなか歸れないよ。獨身生活を *berufsmässig* に遣つてゐる先生の退却した迹で、最後の突撃を加へなければならぬからな。

箕村だつてさうだ。僕は何故にお稻荷さんが、特に女中をしてゐたお梅さんを抜擢したかといふことまで、神慮に立ち入つて究めることは敢てしない。併し兎に角第二の細君が直ぐに出來たのは、箕村の爲めに幸福であつた。箕村は一日も不自由をしない。箕村のお客たる僕なんぞも不自由をしない。主人が幸福なら、客も幸福だ。」

主人の無頓着らしい顔には、富田がいくら管を巻いても矢張微笑の影が消えない。



戸川は主人に目食はせをした。「いや。大變遅くなつた。もうお暇をします。」  
そして起ちさうにして起たずに、頻りに富田を促すのである。「さあ。君も行かうぢやないか。もう分かつてゐるよ。分かつてゐるよ。」

戸川はとうとう引き摩るやうにして富田を連れ出した。

富田は少しよろけながら支關へ出て、大聲にどなつてゐる。「おい。お竹さん。もう一本熱いのを貰ふ筈だが、こん度の晩まで預けて置くよ。」

主人は送りに出て、戸川に囁いた。「車を呼びに遣らうか。」

「なに。どうせ同じ道ですから、僕が門まで一しよに行きます。さやうなら。」

## 六

二人の客の歸つた迹は急にひつそりした。旭町の太鼓はいつか止んでゐて、今まで聞えなかつた海の鳴る音なごがする。

竹が出て来て、酒や茶の道具を片付けてゐる。主人の大野は、見るともなしにそれを見てゐたが、ふいと竹を女として視ようとした。

背の低い、髪の薄い、左右の目の大きさの少し違つてゐる女である。初め奉公に来た時は瘦せて蒼い顔をしてゐて、しをらしいやうな處があつた。それが此家に来てから段々肥えて、頬つぺたが膨ふらんで来た。女振は餘程下がつたのである。

宿元は小倉に近い處にあるが、兄が博多で小料理屋をしてゐる。飯焚なんぞをするより、酌でもしてくれば、嫁人仕度位は直ぐ出来るやうにして遣ると、兄が勧めたので、暫く博多に行つてゐたが、そこへ来る客といふのが、皆マドロスばかりで、ひどく亂暴なので、恐れて逃げ歸つたのださうだ。裏表うらおもてのない、主人の爲めを思つて働く、珍らしい女中である。併し女として視ることはむづかしい。これまで一度も女だと思つたことがなかつたが、今女だと思はうとしても、それが殆ど不可能である。異性のものだといふ感じは所詮起らなかつた。

道具を片付けてしまつて起つて行くのを、主人は見送つて、覺えず微笑した。そして自分の冷澹なのを、稍々訝るやうな心持になつた。

此心持が妙に反抗的に、自分のどこかに異性に對する感じが潜んでゐはしないかと捜すやうな心持を呼び起した。

大野の想像には、小倉で戦死者のために法會をした時の事が浮ぶ。本願寺の御連枝が來られ



たので、式場の天幕の周囲には、老若男女がぎしぎしと詰め掛けてゐた。大野が來賓席の椅子に掛けてゐると、段々見物人が押して來て、大野の膝の間の處へ、島田に結つた百姓の娘がしやがんだ。お白いと髪の毛の油との匂がする。途中まで聞いてゐた誰やらの演説が、只雑音のやうに耳に聞えて、この島田に掛けた緋鹿子を見る視官と、この髪や肌から發散する匂を嗅ぐ嗅覺とに、暫くの間自分の心が全く奪はれてゐたのである。此一刹那には大野も慥かに官能の奴隷であつた。大野はその時の事を思ひ出して、又覺えず微笑した。

大野は今年四十になる。一度持つた妻に別れたのは、久しい前の事である。獨身で小倉に來てゐるのを、東京にゐるお祖母あさんがひどく案じて、手紙をよこす度に娘の詮議をしてゐる。今宵もお祖母あさんの手紙の來たのを、客があつたので、封を切らずに机の上に載せて置いた。

大野は昏くなつたランプの心を振ち上げて、その手紙の封を開いた。行儀の好いお家流の細字を見れば、あの角縁つがひの目金を掛けたお祖母あさんの顔を見るやうである。

歳暮もおひおひ近く相成候へば、御上京なされ候日の、指折る程に相成候を樂み居り候。前便に申上候井上の嬢さんに引き合せくれんと、谷田の奥さんが申され候ゆゑ、今日上野へま

あり、只今歸りて此手紙をしたため候。私と谷田の奥さんにて先に參りをり候處へ、富子さん母上と御一しよに來られ、車を降りて立ち居られ候高島田の姿を、初て見候時には、實に驚き申候。世の中にはこの様な美しき人もあるものかと、不思議に思はれ候程に候。此人を見せたらば、いかに女嫌のお前様もいやとは申さるまじと存じ候。性質は一度逢ひしのみにて、何とも申されず候へども、伶俐なることは慥かに候。只一つ不思議に思はれしは、茶店に憩ひて一時間ばかりもゐたるに、富子さんは一度も笑はざりし事に候。丁度西洋人の一組同じ茶店にゐて、言語通ぜざる爲め、色々をかしき事などありて、谷田の奥さん例の達者なる英語にて通辯をして遣され、富子さんの母上も私も笑ひ候に、富子さんは少しも笑はずにをられ候、尤前便に申上候通、不幸なる境遇に居られし人なれば、同じ年頃の娘とは違ふ所もあるべき道理かと存じ候。何は兎もあれ、御前様の一日も早く御上京なされ候て、私の眼鏡の遣はざることを御認なされ候を、ひたすら待入候。かしこ。

尙々精次郎夫婦よりも宜しく可申上様申出候。先日石崎に申附候龜甲萬一樽もはや相届き候事と存じ候。

讀んでしまつた大野は、竹が机の傍へ出して置いた雪洞に火を附けて、それを持つて、ラン



ブを吹き消して起つた。これから猫寝の冷たい床に這入つてどんな夢を見ることやら。

## 棧 橋

棧橋が長い長い。

四筋の軌道が、縦に斜に切つてゐる鐵橋の梁に、長い桁と短い桁とが、子供のおもちゃにする木琴のやうにわたしてある。靴の踵や下駄の齒を噛みさうな桁の隙から、所々に白く日の光を反射してゐる黒い波が見える。

空は眞蒼に晴れてゐる。

今日立つ夫と并んで腰を掛けてゐた。新橋發の一等汽車の室内では、風が吹くやうには思はなかつたが、横濱停車場から乗つた人力車を降りて、此棧橋の上に立つて見れば、三月五日の風がまだ肌を刺すやうに吹いて来て、吾妻コオトの裾を翻すのである。

今日立つ夫の胤を宿して、臨月の程遠からぬ體に、寛く纏つてゐる、銀鼠色の吾妻コオトである。

髪は束髪に結はせて出た。ボアは白の鴉鳥である。



總の下がつた萌葱色の蝙蝠傘を挿して、四五人の女中に取り巻かれて歩む。  
棧橋が長い長い。

右にも左にも大きい船が着いて居る。黒く塗つたものもある。褐色に塗つたものもある。

着いてゐる船は風の垣をしてゐる。船のある處を離れる度に、冷い風がさつと吹いて来て、  
吾妻コオトの裾を翻すのである。

夫の伯爵は一昨年文科大學を出られて直に結婚せられた。始て玉のやうな姫君を生み落した  
のが昨年である。その暮に式部官になられた。そして今は官職を帯びた儘、倫敦へ立たれるの  
である。

新しく爲立させた霜降の外套を着て、柄の曲がつたステッキを振つて、夫はずん／＼棧橋の  
上を進んで行かれる。背の頭だけ高い同行の子爵某の君も、同じやうな服を着て、肩を并べて  
ずん／＼行つてしまはれる。

夫の乗られる筈の佛蘭西船は棧橋の一番端の右側に着いてゐる。

棧橋の上に、電車の線の修覆をする時に使ふやうな臺が据ゑてあつて、それから舷へ横に梯  
がわたしてある。

徐かに足を運んで行くうちに、夫と連の子爵とは、その梯を渡つて船に乗り移つてしまはれ  
るのが見える。

見送りの人の群が棧橋の所々に足を留めてゐる。大抵皆夫と子爵とを送りに来た人ばかりで  
ある。多分今出る船で立つ客には、外に多勢に送られるやうな人はないのであらう。

梯のわたしてある臺の下に行つて、そこに立ち留まつて連を待ち合せてゐる人もある。夫と  
子爵との跡に附いて梯を渡つて行く人もある。臺の少し手前に、材木や繩の置いてあるあたり  
に立ち留まつてゐる人もある。

此人々の中には、夫や子爵に親しい人もあらう。又疎い人もあらう。それが今日の晴やかな  
空の下に立つてゐて、皆悄然としてゐるやうに見えるのは、思ひなしであらうか。

棧橋が長い長い。

徐かに跡から附いて行きながら、ふと右の方を見れば、船の腹に圓い窓がいくつもあいてゐ  
る。その圓い窓の一つから女の顔と胸とが見える。年は三十から四十まで位のが三人で。皆胸  
に白い前掛をしてゐる。船の給仕女であらう。夫の乗つて行かれる船で、給仕をする女かと思  
へば、その賤しい女さへ羨ましく思はれるのである。



敷にも白い巾マフで飾つた大きい帽を被つて、手に小さい革包を提げて、棧橋を見おろしてゐる女がある。皺の寄つた顔の、鉤のやうな大きい鼻の上に、青い暈くまを取つたやうな大きい目が光つてゐる。猶太人らしい。あれは旅の女で、矢張同じ船に乗つて立つのであらう。あの女も羨ましいのである。

棧橋が長い長い。

やうやう梯の下に行き着く。吾妻コオトの蔭に、夫の二人目の胤を包んだ體を、おそるおそる梯の上に運んで、黒く塗つた大きい船の甲板に降り立つ。傘を女中の手にわたす。

早く乗り移つてゐた見送りの人に引かれて、敷に沿うて艙とぐの方へ戻る。その行き當りの處に、眞鍮の札に二十七より二十九と番號の書いてある室がある。

入口に子爵が立つてゐて、聲を掛けられる。「此部屋でございますよ。」

室内を覗けば、床が二つ竝んでゐる。其下には見覚えのある手廻りの行李が運び入れてある。夫は一つの床の前に立つてゐられる。「見て置いて下さい。こんな部屋ですよ。」

善く見て覺えて置かなくてはならない部屋である。長い長い夫の航海の間、我夢の通ふべき部屋がこれである。

船長らしい男が来て、佛蘭西語で夫を船のサロンへ案内する。夫と子爵との跡に附いて這入つて見る。

広い美しいサロンである。卓がいくつも竝べてある。どれにも花籃が据ゑてある。見送りに來た人が次第にそこへ集まつて來る。

船長らしい男が指圖をすると、給仕の男が朝顔形の蓋を澤山出して來て、それにシャンパンエを注いで、人々に配る。今一人の給仕の男がアイスクリームと一しよに出すやうな菓子を、井桁のやうに皿の上に積んだのを持つて來て、人々に配る。

蓋を受け取つた人は、かはるがはる夫と子爵との前に行つて、旅の幸福を祝して飲む

卓の傍の小さい椅子に腰を掛けて、此祝福の濟むのを待つてゐる。夫は應接の忙しい中にも折々目をこちらへ向けられる。

併し夫の方でも最早多勢の人の前で自分と言ふべき詞はないのである。こちらからも最早多勢の人の前で夫と言ふべき詞はないのである。

鐸が鳴る。見送りの人々が一人一人夫と子爵との前に行つて暇乞をして出る。自分も黙つて夫と子爵とに會釋をして附いて出る。



又先きの危げな梯を渡つて、棧橋の上に降り立つ。女中の手から萌葱の傘を受け取つてさす。夫と子爵とは舷に立つて見下してゐられる。こちらは傘の下から見上げてゐる。見上げてゐる自分の目が、次第に大きくなるやうな心持がする。

又鐸が鳴る。佛蘭西人の舟夫が二三人、梯の繩を解きはじめる。電車の修覆に使ふやうな臺の上には、絆纏を着た日本人の爲事師が立つてゐて、梯を卸す用意をしてゐる。絆纏の男の引く轆轤の索に引られて、梯はとうとう舷を脱れた。

横濱市の號砲が響く。先の程から底の方で、がたがたと機關の音をさせてゐた船が、これを合圖にすうと動き出す。

年寄つた夫婦らしい西洋人が舷に立つてゐる。棧橋の上の、纜を巻き附ける大絲卷のやうな物に、片足を載せてゐる白髪の爺いさんと、何やら氣樂らしい話をしてゐる。長い別を惜むものとも見えない。

船が動くやうにもある。棧橋が動くやうにもある。夫と子爵との立つてゐられる處と、自分の立つてゐる處との間に、*Parallaxe* の差が生じて来る。自分の目が大きく大きくなるやうな心持がする。

見送の人々の中には、棧橋のはづれまで走つて行くものもある。自分にはそんなはしたない眞似は出来ないのである。

ふいと舷で白い物が閃いた。それは白い巾で飾つた大きい帽の女の手でハンカチーフを振るのであつた。棧橋の端に立つてゐる、赤いチヨキを着て、天然色の靴を穿いた、背の高い男がある。その男の手からも、同じ白い物が閃く。これも人の別離であらう。

此二人が端緒を開いてから、そここゝにハンカチーフを振る人がある。棧橋のはづれ迄出た、伯爵の一行を送る人々の中でも、白い物が閃くのである。自分も袂に入れて来た、バチストのハンカチーフを瘦せた指に擱んでは見たが、どうもそんなはしたない眞似は出来ないのである。船は棧橋を離れたと思ふと、少し舳先を右に向けた。夫と子爵との立つてゐられる處は、とうとう見えなくなつてしまつた。

艦の横の方に、*Douglas* とかいふものゝやうな淺葱色の寒さうな服を着た、十五六歳位な少年の立つてゐるの丈がまだ見える。どんな母が佛蘭西で待つてゐる子であらうか。それとも親はないのであらうか。艦の横の方に立つて、こちらを見てゐるのは、何を見てゐるのであらうか。自分は徐かに踵を旋らした。そして四五人の女中に取り巻かれて歩む。



棧橋が長い長い。

今まで黒く塗つた船のゐた跡には、小さい波が白らけた日の光を反射して、魚の鱗のやうに輝いてゐる。

あ そ び

木村は官吏である。

或日いつもの通りに、午前六時に目を醒ました。夏の初めである。もう外は明るくなつてゐるが、女中が遠慮してこの間丈は雨戸を開けずに置く。蚊帳の外に小さく燃えてゐるランプの光で、獨寝の闇が寂しく見えてゐる。

器械的に手が枕の側を探る。それは時計を捜すのである。遞信省で車掌に買つて渡す時計だとかで、頗る大きいニッケル時計なのである。針はいつもの通り、きちんと六時を指してゐる。「おい。戸を開けんか。」

女中が手を拭き／＼出て来て、雨戸を繰り開ける。外は相變らず、灰色の空から細かい雨が降つてゐる。暑くはないが、じめ／＼とした空気が顔に當る。

女中は湯帷子に襪を肉に食ひ入るやうに掛けて、戸を一枚一枚戸袋に繰り入れてゐる。額には汗がにじんで、それに亂れた髪の毛がこびり附いてゐる。



「は、あ、けふも運動すると暑くなる日だな」と思ふ。木村の借家から電車の停留場まで七八町ある。それを歩いて行くと、涼しいと思つて門口を出ても、行き着くまでに汗になる。その事を思つたのである。

縁側に出て顔を洗ひながら、今朝急いで課長に出す筈の書類のあることを思ひ出す。併し課長の出るのは八時三十分頃だから、八時までには役所へ行けば好いと思ふ。

そして頗る愉快げな、晴々とした顔をして、陰気な灰色の空を眺めてゐる。木村を知らないものが見たら、何が面白くてあんな顔をしてゐるかと怪むことだらう。

顔を洗ひに出てる間に、女中が手早く蚊帳を疊んで床を上げてゐる。そこを通り抜けて、唐紙を開けると、居間である。

机が二つ九十度の角を形づくるやうに据ゑて、その前に座布團が鋪いてある。そこへ据ゑつて、マツチを擦つて、朝日を一本飲む。

木村は爲事をするのに、差當りしなくてはならない事と、暇のある度にする事とを別けてゐる。一つの机の上を綺麗に空虚にして置いて、その上へ其折々の急ぐ爲事を持つて行く。そしてその急ぐ爲事が片付くと、すぐに今一つの机の上に乗せてある物をそのあとへ持ち出す。こ

の載せてある物はいつも多い。堆く積んである。それは緩急によつて疊ねて、比較的急ぐものを上にして置くのである。

木村は座布團の側にある日出新聞を取り上げて、空虚にしてある机の上に廣げて、七面の處を開ける。文藝欄のある處である。

朝日の灰の翻れるのを、机の向うへ吹き落しながら讀む。顔は矢張晴々としてゐる。

唐紙のあつちからは、はたきと箒との音が劇しく聞える。女中が急いで寢間を掃除してゐるのである。はたきの音が殊に劇しいので、木村は度々小言を言つたが、一日位直つても、又元の通りになる。はたきに附けてある紙ではたかずに、柄の先きではたくのである。木村はこれを「本能的掃除」と名づけた。鳩の卵を抱いてゐるとき、卵と白墨の角を剗したのと取り換へて置くと、矢張其白墨を抱いてゐる。目的は餘所になつて、手段丈が實行せられる。塵を取る爲めとは思はず、はたく爲めにはたくのである。

尤も此女中は、本能的掃除をしても、「舌の戦き」をしても、活潑で間に合ふので、木村は満足してゐる。舌の戦きといふのは、ロオマンチック時代の或小説家の云つた事で、女中が主人の出た迹で、近所をしゃべり廻るのを謂ふのである。



木村は何か讀んでしまつて、一寸顔を蹙めた。大抵いつも新聞を置くときは、極 アパチツク apathic な表情をするか、さうでなければ、顔を蹙めるのである。書いてあるのは毒にも薬にもならないやうな事であるか、さうでなければ、木村が不公平だと感ずるやうな事であるからである。そんなら讀まなくても好きさうなものであるが、矢張讀む。讀んで氣のない顔をしたり、一寸顔を蹙めたりして、すぐに又晴々とした顔に戻るのである。

木村は文學者である。

役所では人の手間取のやうな、精神のないやうな、附けたりのやうな爲事をしてゐて、もう頭が禿げ掛かつて、まだ一向幅が利かないのだが、文學者としては多少人に知られてゐる。ろくな物も書いてゐないのに、人に知られてゐる。嘗に知られてゐるばかりではない。一旦人に知られてから、役の方が地方勤めになつたり何かして、死んだものゝやうにせられて、頭が禿げ掛かつて後に東京へ戻されて、文學者として復活してゐる。手数の掛かつた履歴である。木村が文藝欄を讀んで不公平を感ずるのが、自利であつて、毀られれば腹を立て、褒められれば喜ぶのだと云つたら、それは冤罪だらう。我が事、人の事と言はず、くだらない物が讃めてあつたり、面白い物がけなしてあつたりするのを見て、不公平を感ずるのである。勿論自

分が引合に出されてゐる時には、一層切實に感ずるには違ない。

ルウズエルトは「不公平と見たら、戦へ」と世界中を説法して歩いてゐる。木村はなぜ戦はないだらうか。實は木村も前半世では盛んに戦つたのである。併し其頃から役人をしてゐるので、議論をすれば著作が出来なかつた。復活してからは、下手ながらに著作をしてゐるので、議論なんぞは出来ないのである。

其日の文藝欄にはこんな事が書いてあつた。

「文藝には情調といふものがある。情調は シチュアション situation の上に成り立つ。併し インデフィニツク indefinissable なものである。木村の關係してゐる雑誌に出てゐる作品には、どれにも情調がない。木村自己のものにも情調がないやうである。」

約めて言へばこれ丈である。そして反對に情調のある文藝といふものが例で示してあつたが、それが一々木村の感服してゐるものでもなかつた。中には木村が、立派な作者があんな物を書かなければ好いと思つたものなんぞが擧げてあつた。

一體書いてある事が、木村には善くは分らない。シチュアションの上に成り立つ情調なんぞと云ふ詞を讀んでも、何物をもはつきり考へることが出来ない。木村は随分哲學の本も、藝



術を論じた本も読んでゐるが、こんな詞を讀んでは、何物をもはつきり考へることが出来ない。いかにも文藝には、アンデファイニツサアブルだとも云へば云はれさうな、面白い處があるだらう。それは考へられる。併しシチュアションとはなんだから。昔からドラマムやなんぞで、人物を時と所とに配り附けた上に出來るものと言ふではないか。ヘルマン・バルが舊い文藝の視ひ處としてゐる、急劇で、豊富で、變化のある行爲の緊張なんといふものと、差別はないではないか。そんなものゝ上に限つて成り立つといふのが、木村には分からないのである。

木村はさ程自信の強い男でもないが、その分からないのを、自分の頭の悪いせゐだとは思はなかつた。實は反對に記者の爲めに頗る氣の毒な、失敬な事を考へた。情調のある作品として擧げてある例を見て、一層失敬な事を考へた。

木村の盛めた顔はすぐに暗々としてしまつた。そして一人者のなんでも整頓する癖で、新聞を丁寧に疊んで、居間の縁側の隅に出して置いた。かうして置けば、女中がランプの掃除に使つて、餘つて不用になると、屑屋に賣るのである。

これは長々とは書いたが、實際二三分間の出來事である。朝日を一本飲む間の出來事である。朝日の吸殻を、灰皿に代用してゐる石決明貝に棄てると同時に、木村は何やら思ひ附いたと

いふ風で、獨笑をして、側の机に十冊ばかり積み上げてある マニユスクリイ manuscriptsらしいものを一拘ぎに抱いて、それを用筆筒の上に運んだ。

それは日出新聞社から頼まれてゐる應募脚本であつた。

日出新聞社が懸賞で脚本を募つたとき、木村は選者になつた。木村は息も衝けない程用事を持つてゐる。應募脚本を讀んでゐる時間はない。そんな時間を拵へるとすれば、それは烟草休の暇をそれに使ふ外はない。

烟草休には誰も不愉快な事をしたくはない。應募脚本なんぞには、面白いと思つて讀むやうなもの、十讀んで一つもあるかないかである。

それを讀まうと受け合つたのは、頼まれて不精々に受け合つたのである。

木村は日出新聞の三面で、度々悪口を書かれてゐる。いつでも「木村先生一派の風俗壞亂」といふ詞が使つてある。中にも西洋の誰やらの脚本を或劇場で興行するのに、木村の譯本を使つた時に此お極りの悪口が書いてあつた。それがどんな脚本かと云ふと、サンシユウル censure の可笑しい程、サンシユウル 厳しいキインやベルリンで、書籍としての發行を許してゐるばかりではない、舞臺での興行を平氣でさせてゐる、頗る甘い脚本であつた。



併しそれは三面記者の書いた事である。木村は新聞社の事情には暗いが、新聞社の藝術上の意見が三面にまで行き渡つてゐないのを怪みはしない。

今讀んだのはそれとは違ふ。文藝欄に、縦令個人の署名はしてあつても、何のことわりがきもなしに載せてある説は、政治上の社説と同じやうなもので、社の藝術観が出てゐるものと見て好からう。そこで木村の書くものにも情調がない、木村の選擇に與つてゐる雑誌の作品にも情調がないと云ふのは、木村に文藝が分からないと云ふのである。文藝の分からないものに、なんで脚本を選ばせるのだらう。情調のない脚本が當選したら、どうするだらう。そんな事をして、應募した作者に濟むか。作者にも濟むまいが、こつちへも濟むまいと、木村は思つた。木村は悪い意味でデレツタントだと云はれてゐる丈に、そんな目に逢つて、面白くもない物を讀まないでも、生活してゐられる。兎に角此一山を退治することは當分御免を蒙りたいと思つて、用筆筒の上へ移したのである。

書いたら長くなつたが、これは一秒時間の事である。

隣の間では、本能的掃除の音が歇んで、唐紙が開いた。膳が出た。

木村は根芋の這入つてゐる味噌汁で朝飯を食つた。

食つてしまつて、茶を一杯飲むと、背中に汗がにじむ。矢張夏は夏だと、木村は思つた。

木村は洋服に着換へて、封を切らない朝日一つ隠しに入れて玄關に出た。そこには辨當と蠟燭傘とが置いてある。杓も磨いてある。

木村は傘をさして、てく／＼出掛けた。停留場までの道は狭い町家續きで、通る時に主人の挨拶をする店は大抵極まつてゐる。そこは氣を付けて通るのである。近所には木村に好意を表してゐて、挨拶などをするものと、冷澁で知らない顔をしてゐるものとがある。敵對の感じを持つてゐるものはないらしい。

そこで木村は、その挨拶をする人はどんな心持でゐるだらうかと推察して見る。先づ小説なぞを書くものは變人だとは確かに思つてゐる。變人と思ふと同時に、氣の毒な人だと感じて、プロテジエ *protégé* にしてくれるといふ風である。それが挨拶をする表情に見えてゐる。木村はそれを厭がりもしないが、無論有難くも思つてゐない。

丁度近所の人の態度と同じで、木村といふ男は社交上にも餘り敵を持つてはゐない。矢張少し馬鹿にする氣味で、好意を表してゐてくれる人と、冷澁に構はずに置いてくれる人とがあるばかりである。



それに文壇では折々退治られる。

木村は只人が構はずに置いてくれれば好いと思ふ。構はずにといふが、著作丈はさせて貰ひたい。それを見當違に罵倒したりなんかせず置いてくれれば好いと思ふのである。そして少數の人がどこかで読んで、自分と同じやうな感じをしてくれるものがあつたら、爲合せだと、心のずつと奥の方で思つてゐるのである。

停留場迄の道を半分程歩いて来たとき、横町から小川といふ男が出た。同じ役所に勤めてゐるので、三度に一度位は道連になる。

「けさは少し早いと思つて出たら、君に逢つた」と、小川は云つて、傘を傾けて、並んで歩き出した。

「さうかね。」

「いつも君の方が先きへ出てゐるぢやあないか。何か考へ込んで歩いてゐたね。大作の趣向を立てゝゐたのだらう。」

木村はかう云ふ事を聞く度に、くすぐられるやうな心持がする。それでも例の晴々とした顔をして黙つてゐる。

「こなひだ『太陽』を見たら、君の役所での秩序的な生活と藝術的生活とは矛盾してゐて、到底調和が出来ないと云つてあつたつけ。あれを見たかね。」

「見た。風俗を壊亂する藝術と官吏服務規則とは調和の出来やうがないと云ふのだらう。」  
 「なる程、風俗壊亂といふやうな字があつたね。僕はさうは取らなかつた。藝術と官吏といふ丈に解したので。政治なんぞは先づ現状の儘では一時の物で、藝術は永遠の物だ。政治は一國の物で、藝術は人類の物だ。」小川は省内での饒舌家で、木村はいつもうさく思つてゐるが、そんな素振はしないやうに努めてゐる。先方は持病の起つたやうに、調子附いて来た。「併し君、ルウズエルトの方々に遣つてゐる演説を讀んでゐるだらうね。あの先生が口で言つてゐるやうに行けば、政治も一時だけの物ではない。一國ばかりの物ではない。あれを一層高尚にすれば、政治が大藝術になるねえ。君なんぞの理想と一致するだらうと思ふが、どうかねえ。」

木村は馬鹿々々しいと思つて、一寸顔を盛めなくなつたのをこらへてゐる。

そのうち停留場に来た。場末の常で、朝出て晩に歸れば、丁度満員の車にばかり乗るやうになるのである。二人は赤い柱の下に、傘を並べて立つてゐて、車を二臺も遣り過して、やつとの事で乗つた。



二人共弔革にぶら下がった。小川はまだしゃべり足りないらしい。

「君。僕の藝術観はどうだね。」

「僕はそんな事は考へない。」不精々々に木村が答へた。

「どう思つて遣つてゐるのだね。」

「どうも思はない。作りたとき作る。まあ、食ひたいとき食ふやうなものだらう。」

「本能かね。」

「本能ぢやあない。」

「なぜ。」

「意識して遣つてゐる。」

「ふん」と云つて、小川は變な顔をして、なんと思つたか、それ切り電車を降りるまで黙つてゐた。

小川に分かれて、木村は自分の部屋の前行つて、帽子掛に帽子を掛けて、傘を立て、置いた。まだ帽子は二つ三つしか掛かつてゐなかつた。

戸は開け放して、竹簾が垂れてある。お爲着せの白服を着た給仕の側を通つて、自分の机の

處へ行く。先きへ出てゐるものも、まだ爲事には掛からずに、扇などを使つてゐる。「お早う」位を交換するのもある。黙つて願で會釋をするのもある。どの顔も蒼ざめた、元氣のない顔である。それも其筈である。一月に一度位、つつ病氣をしないものはない。それをしないのは木村丈である。

木村は「非常持出」と書いた札の張つてある、煤色によれた戸棚から、しめつばい書類を出して来て、机の上へ二山に積んだ。低い方の山は、其日其日に處理して行くもので、その一番上に舌を出したやうに、赤札の張つてある一綴の書類がある。これが今朝課長に出さなくてはならない、急ぎの事件である。高い方の山は、相間々々にぼつ／＼遣れば好い爲事である。當り前の分擔事務の外に、字句の訂正を要する爲めに、餘所の局からも、木村の處へ來る書類がある。そんなのも急ぎでないのは此中に這入つてゐる。

書類を持ち出して置いて、椅子に掛けて、木村は例の車掌の時計を出して見た。まだ八時までに十分ある。課長の出勤するまでには四十分あるのである。

木村は高い山の一番上の書類を廣げて、讀んで見ると、小さい紙切れに糊板の上の糊を附けて張つて、それに何やら書き入れてゐる。紙切れは幾枚かを紙捻で繋いで、机の横側に掛けて



あるのである。役所ではこれを附箋と云つてゐる。

木村はゆつくり構へて、絶えずごつ／＼と爲事をしてゐる。その間顔は始終晴々としてゐる。かういふ時の木村の心持は一寸説明しにくい。此男は何をするにも子供の遊んでゐるやうな氣になつてしてゐる。同じ「遊び」にも面白いのもあれば、詰まらないのもある。こんな爲事はその詰まらない遊びのやうに思つてゐる分である。役所の爲事は笑談ではない。政府の大機關の一小齒輪となつて、自分も廻轉してゐるのだといふことは、はつきり自覺してゐる。自覺してゐて、それを遣つてゐる心持が遊びのやうなのである。顔の晴々としてゐるのは、此心持が現れてゐるのである。

爲事が一つ片附くと、朝日を一本飲む。こんな時は木村の空想も悪戯をし出す事がある。分業といふものは、貧乏籤を引いたものゝ爲めには、随分詰まらない事になるものだなどとも思ふ。併し不平は感じない。そんならと云つて、これが自分の運だと諦めてゐるといふ fatalisteらしい思想を持つてゐるのでもない。どうかすると、こんな事は罷めたらどうだらうなどとも思ふ。それから罷めた先きを考へて見る。今の身の上で、ランプの下で著作をするやうに、朝から晩まで著作をすることになつたとして見る。此男は著作をするときも、子供が好きな遊びをする

やうな心持になつてゐる。それは苦しい處がないといふ意味ではない。どんな sport をしたつて、障礙を凌ぐことはある。又藝術が笑談でないことを知らないのでもない。自分が手に持つてゐる道具も、眞の鉦匠大家の手に渡れば、世界を動かす作品をも造り出すものだと自覺してゐる。自覺してゐながら、遊びの心持になつてゐるのである。ガンベッタの兵が、あるとき突撃をし掛けて鋒が鈍つた。ガンベッタが喇叭を吹けと云つた。そしたら進撃の譜は吹かないで、bell の譜を吹いた。イタリア人は生死の境に立つてゐても、遊びの心持がある。兎に角木村の爲めには何をするのも遊びである。そこで同じ遊びなら、好きな、面白い遊びの方が、詰まらない遊びより好いには違ひない。併しそれも朝から晩までしてゐたら、單調になつて厭きるだらう。今の詰まらない爲事にも、此單調を破る丈の機能はあるのである。

此爲事を罷めたあとで、著作生活の單調を破るにはどうしよう。それは社交もある。旅もある。併しそれには金がある。人の魚を釣るのを見てゐるやうな態度で、交際社會に臨みたくはない。ゴルキイの様な vagabondage をして愉快を感じるには、ロシア人のやうな遺傳でもなくて駄目らしい。矢張けちな役人の方が好いかも知れないと思つて見る。そしてさう思ふのが、別に絶望のやうな苦しい感じを伴ふわけでもないのである。



或時は空想が愈々放縱になつて、戦争なんその夢も見る。喇叭は進撃の譜を奏する。高く撃げた旗を望んで駈歩をするのは、さぞ爽快だらうと思つて見る。木村は病氣といふものをしたことがないが、小男で瘦せてゐるので、徴兵に取られなかつた。それで戦争に行つたことはない。併し人の話に、壮烈な進撃とは云つても、實は土囊を翳して匍匐して行くこともあると聞いてゐるのを思ひ出す。そして多少の興味を殺される。自分だつて其境に身を置いたら、土囊を翳して匍匐することは辭せない。併し壯烈だとか、爽快だとかいふ想像は薄らぐ。それから縦ひ戦争に行くことが出来ても、輜重に編入せられて、運搬をさせられるかも知れないと思つて見る。自分だつて車の前に立たせられたら、挽きもしよう。後に立たせられたら、推しもしよう。併し壯烈や爽快とは一層縁遠くなると思ふのである。

或時は航海の夢も見る。屋の如き浪を凌いで、大洋を渡つたら、愉快だらう。地極の氷の上に国旗を立てるのも、愉快だらうと思つて見る。併しそれにも矢張分業があつて、蒸汽機關の火を焚かせられるかも知れないと思ふと、*enthousiasme* の夢が醒めてしまふ。

木村は爲事が一つ片附いたので、その一括の書類を机の向うに押し遣つて、高い山から又一括の書類を卸した。初のは半紙の野紙であつたが、こん度のは紫板の西洋紙である。手の平に

べたりと食つ附く。丁度物干竿と一しよに蛸鯨を掴んだやうな心持である。

此時までに五六人の同僚が次第に出て来て、いつか机が皆塞がつてゐた。八時の鐸が鳴つて暫くすると、課長が出た。

木村は課長がまだ腰を掛けないうちに、赤札の附いた書類を持つて行つて、少し隔つた處に立つて、課長のゆつくり書類を *portefeuille* から出して、硯箱の蓋を取つて、墨を磨るのを見てゐる。墨を磨つてしまつて、偶然のやうにこつちへ向く。木村よりは三つ四つ歳の少い法學博士で、目附鼻附の緊まつた、餘地の少い、敏捷らしい顔に、金縁の目金を掛けてゐる。

「昨日お命じの事件を」と云ひさして、書類を出す。課長は受け取つて、ざつと讀んで見て、「これで好い」と云つた。

木村は重荷を卸したやうな心持をして、自分の席に歸つた。一度出して通過しない書類は、なか／＼二度目位で滞りなく通過するものではない。三度も四度も直させられる。そのうちには向うでも種々に考へて見るので、最初云つた事とは多少違つて来る。とう／＼手が附けられなくなつてしまふ。それで一度で通過するのを喜ぶのである。

席に歸つて見ると、茶が来てゐる。八時に出勤したとき一杯と、午後勤務のあるときは三時



頃に一杯とは、黙つてゐても、給仕が持つて来てくれる。色が附いてゐる丈で、味のない茶である。飲んでしまふと、茶碗の底に滓が澤山淀んでゐる。

木村は茶を飲んでしまふと、相變らずゆつくり構へて、絶間なくごつごつと爲事をする。低い方の山の書類の處理は、折々帳簿を出して照らし合せて見ることがあるばかりで、ぐんぐんはかが行く。三件も四件も烟草休なしに済ましてしまふことがある。済んだのは、檢印をして、給仕に持たせて、それぐんぐん廻す先きへ廻す。書類中には直ぐに課長の處へ持つて行くものもある。その間には新しい書類が廻つて来る、赤札のは直ぐに取り扱ふ。その外はどの山かの下へ入れる。電報は大抵赤札と同じやうにするのである。

爲事をしてゐるうちに、急に暑くなつたので、ふいと向うの窓を見ると、朝から灰色の空の見える處に、紫掛かつた暗色の雲がまろがつて居る。

同僚の顔を見れば、皆ひどく疲れた容顔をしてゐる。大抵下顎が弛んで垂れて、顔か心持長くなつてゐるのである。室内の濕つた空氣が濃くなつて、頭を壓すやうに感ぜられる。今のやうに特別に暑くなつた時でなくても、執務時間が稍や進んでから、便所に行つた歸りに、廊下から這入ると、悪い烟草の匂と汗の香とで噎せるやうな心持がする。それでも冬になつて、煖

爐を焚いて、戸を締め切つてゐる時よりは、夏の此頃が過かに増してゐる。

木村は同僚の顔を見て、一寸顔を蹙めたが、すぐに又晴々した顔になつて、爲事に掛かつた。

暫くすると雷が鳴つて、大降りになつた。雨が窓にぶつ附かつて、恐ろしい音をさせる。部屋中のものが、皆爲事を置いて、窓の方を見る。木村の右隣の山田といふ男が云つた。

「むし／＼すると思つたら、とう／＼夕立が來ましたな。」

「さうですね」と云つて、晴々とした不斷の顔を右へ向けた。

山田は其顔を見て、急に思ひ附いたらしい様子で、小聲になつて云つた。

「君はぐん／＼爲事を抄らせるが、どうもはたで見えてゐると、笑談にしてゐるやうでならない。」

「そんな事はないよ」と、木村は恬然として答へた。

木村が人にこんな事を言はれるのは何遍だか知れない。此男の表情、言語、舉動は人にかういふ詞を催促してゐると云つても好い。役所でも先代の課長は不眞面目な男だと云つて、ひどく嫌つた。文壇では批評家が眞剣でないと云つて、けなしてゐる。一度妻を持つて、不幸にして別れたが、平生何かの機會で衝突する度に、「あなたはわたしを茶かしてばかり入らつしや」と云ふのが、其細君の非難の主なるものであつた。



木村の心持には眞剣も木刀もないのであるが、あらゆる爲事に對する「遊び」の心持が、ノラでない細君にも 人形にせられ、おもちゃにせられる不愉快を感じさせたのであらう。

木村の爲めには、此の遊びの心持は「與へられたる事實」である。木村と往來してゐる或る青年文士は、「どうも先生には現代人の大事な性質が闕けてゐます、それは ネララジテエ *herosité* です」と云つた。併し木村は格別それを不幸にも感じてゐないらしい。夕立のあとは又小降になつて餘り涼しくもならない。

十一時半頃になると、遠い處に住まつてゐるもの丈が、辨當を食ひに食堂へ立つ。木村は號砲が鳴るまでは爲事をしてゐて、それから一人で辨當を食ふことにしてゐる。

二三人の同僚が食堂へ立つたとき、電話のベルが鳴つた。給仕が往つて暫く聞いてゐたが、「少々お待ち下さい」と云つて置いて、木村の處へ來た。

「日出新聞社のものですが、一寸電話口へお出下さいと申すことです。」

木村が電話口に出た。

「もし〜。木村ですが、なんの御用ですか。」

「木村先生ですか。お呼立て申して濟みません。あの應募脚本ですが、いつ頃御覽濟になりま

せうか。」

「さうですなあ。此頃忙しくて、まだ急には見られませんよ。」

「さやうですか。」なんと云はうかと、暫く考へてゐるらしい。「いづれ又伺ひます。何分宜しく。」

「さやうなら。」

「さやうなら。」

微笑の影が木村の顔を掠めて過ぎた。そしてあの用筆筒の上から、當分脚本は降りないのだと、心の中で思つた。昔の木村なら、「あれはもう見ない事にしました」なんぞと云つて、電話で喧嘩を買つたのである。今は大分おとなしくなつてゐるが、彼れの微笑の中には多少の ボスマイト *Bosheit* がある。併しこんな、けちな悪意では、ニイチエ主義の現代人にもならぬまい。

號砲が鳴つた。皆が時計を出して巻く。木村も例の車掌の時計を出して巻く。同僚はもうとつくに書類を片付けてゐて、どや〜退出する。木村は給仕と只二人になつてゆつくり書類を戸棚にしまつて、食堂へ行つて、ゆつくり辨當を食つて、それから汗臭い満員の電車に乗つた。



普 請 中

渡邊參事官は歌舞伎座の前で電車を降りた。

雨あがりの道の、ところ／＼に残つてゐる水溜まりを避けて、木挽町の河岸を、遞信省の方へ行きながら、たしか此邊の曲がり角に看板のあるのを見た筈だと思ひながら行く。

人通りは餘り無い。役所歸りらしい洋服の男五六人がや／＼話しながら行くのに逢つた。

それから半衿の掛かつた着物を着た、お茶屋の姉えさんらしいのが、何か近所へ用達しにでも出たのか、小走りに靡れ違つた。まだ幌を掛けた儘の人力車が一臺跡から駈け抜けて行つた。

果して精養軒ホテルと横に書いた、割に小さい看板が見附かつた。

河岸通りに向いた方は板圍ひになつてゐて、横町に向いた寂しい側面に、左右から横に登るやうに出来てゐる階段がある。階段は尖を切つた三角形になつてゐて、その尖を切つた處に戸口が二つある。渡邊はどれから這入るのかと迷ひながら、階段を登つて見ると、左の方の戸口に入口と書いてある。

靴が大分泥になつてゐるので、丁寧に掃除をして、硝子戸を開けて這入つた。中は広い廊下のやうな板敷で、ここには外にあるのと同じやうな、棕櫚の靴拭ひの傍に雑巾が廣げて置いてある。渡邊は、己のやうなきたない靴を穿いて来る人が外にもあると思ひながら、又靴を掃除した。

あたりはひつそりとして人氣がない。唯少し隔たつた處から騒がしい物音がするばかりである。大工が這入つてゐるらしい物音である。外に板圍ひのしてあるのを思ひ合せて、普請最中だと思ふ。

誰も出迎へる者がないので、眞直に歩いて、衝き當つて、右へ行かうか左へ行かうかと考へてゐると、やつとの事で、給仕らしい男のうろついてゐるのに、出合つた。

「きのふ電話で頼んで置いたのだがね。」

「は。お二人さんですか。どうぞお二階へ。」

右の方へ登る梯子を教へてくれた。すぐに二人前の註文をした客と分かつたのは普請中殆ど休業同様にしてゐたからであらう。此邊まで入込んで見れば、ます／＼釘を打つ音や手斧を掛ける音が聞えて来るのである。



梯子を登る跡から給仕が附いて来た。どの室かと迷つて、背後を振り返りながら、渡邊はか  
り云つた。

「大分賑やかな音がするね。」

「いえ。五時には職人が歸つてしまひますから、お食事中騒々しいやうなことはございませ  
ん。暫くこちらで。」

先へ駈け抜けて、東向きの室の戸を開けた。這入つて見ると、二人の客を通すには、ちと大  
き過ぎるサロンである。三所に小さい卓が置いてあつて、どれをも四つ五つ宛の椅子が取り巻  
いてゐる。東の右の窓の下にソファもある。その傍には、高さ三尺許の葡萄に、暖室で大きい  
實をならせた盆栽が据ゑてある。

渡邊があちこち見廻してゐると、戸口に立ち留まつてゐた給仕が、「お食事はこちらで」と云  
つて、左側の戸を開けた。これは丁度好い室である。もうちやんと食卓が拵へて、アザレエや  
ロドダンドロンを美しく組み合せた盛花の籠を眞中にして、クウエエルが二つ向き合せて置い  
てある。今二人位は這入られよう、六人になつたら少し窮屈だらうと思はれる、丁度好い室で  
ある。

渡邊は稍満足してサロンへ歸つた。給仕が食事の室から直ぐに勝手の方へ行つたので、渡  
邊は始てひとりになつたのである。

金槌や手斧の音がぱつたり止んだ。時計を出して見れば、成程五時になつてゐる。約束の時  
刻までには、まだ三十分あるなと思ひながら、小さい卓の上に封を切つて出してある箱の葉巻  
を一本取つて、尖を切つて火を附けた。

不思議な事には、渡邊は人を待つてゐるといふ心持が少しもしない。その待つてゐる人が誰  
であらうと、殆ど構はない位である。あの花籠の向うにどんな顔が現れて来ようとも、殆ど構  
はない位である。渡邊はなぜこんな冷澹な心持になつてゐられるかと、自ら疑ふのである。

渡邊は葉巻の烟を緩く吹きながら、ソファの角の處の窓を開けて、外を眺めた。窓の直ぐ下  
には材木が澤山立て列べてある。ここが表口になるらしい。動くとも見えない水を湛へたカナ  
ルを隔てて、向側の人家が見える。多分待合か何かであらう。往來は殆ど絶えてゐて、その家  
の門に子を負うた女が一人ぼんやり佇んでゐる。右のはづれの方には幅廣く視野を遮つて、海  
軍参考館の赤煉瓦がいかめしく立ちたかつてゐる。

渡邊はソファに腰を掛けて、サロンの中を見廻した。壁の所々には、偶然ここで落ち合つた



といふやうな掛物が幾つも掛けてある。梅に鶯やら、浦島が子やら、鷹やら、どれもく／＼小さい丈の短い幅なので、天井の高い壁に掛けられたのが、尻を端折つたやうに見える。食卓の拵へてある室の入口を挟んで、聯のやうな物の掛けてあるのを見れば、某大改正の書いた神代文字といふものである。日本は藝術の國ではない。

渡邊は暫く何を思ふともなく、何を見聞くともなく、唯烟草を呑んで、體の快感を覚えてゐた。廊下に足音と話聲とがする。戸が開く。渡邊の待つてゐた人が來たのである。麥藥の大きいアンヌマリイ帽に、珠數飾りをしたのを被つてゐる。鼠色の長い着物式の上衣の胸から、刺繡をした白いバチストが見えてゐる。ジュボンも同じ鼠色である。手にはヲランの附いた、おもちやのやうな蝙蝠傘を持つてゐる。渡邊は無意識に微笑を粧つてソファから起き上がつて葉巻を灰皿に投げた。女は、附いて來て戸口に立ち留まつてゐる給仕を一寸見返つて、その目を渡邊に移した。ブリュネットの女の、褐色の、大きい目である。此目は昔度々見たことのある目である。併しその縁にある、指の幅程な紫掛かつた濃い暈は、昔無かつたのである。

「長く待たせて。」

獨逸語である。ぞんざいな詞と不弔合に、傘を左の手に持ち替へて、おうやうに手袋に包ん

だ右の手の指尖を差し伸べた。渡邊は、女が給仕の前で芝居をするなど思ひながら、丁寧にその指尖を撮まんだ。そして給仕にかう云つた。

「食事の好い時はさう云つてくれ。」

給仕は引つ込んだ。

女は傘を無造作にソファの上に投げて、さも疲れたやうにソファへ腰を落して、卓に兩肘を衝いて、黙まつて渡邊の顔を見てゐる。渡邊は卓の傍へ椅子を引き寄せて据わつた。暫くして女が云つた。

「大さう寂しい内ね。」

「普請中なのだ。さつき迄恐ろしい音をさせてゐたのだ。」

「さう。なんだか氣が落ち着かないやうな處ね。どうせいつだつて氣の落ち着くやうな身の上ではないのだけど。」

「一體いつどうして來たのだ。」

「おとつひ來て、きのふあなたにお目に掛かつたのだわ。」

「どうして來たのだ。」



「去年の暮からウラヂオストックにゐたの。」

「それぢやあ、あのホテルの中にある舞臺で遣つてゐたのか。」

「さうなの。」

「まさか一人ぢやあるまい。組合か。」

「組合ぢやないが、一人でもないの。あなたも御承知の人が一しよなの。」少しためらつて、

「コジンスキイが一しよなの。」

「あのボラツクかい。それぢやあお前はコジンスカアなのだな。」

「嫌だわ。わたしが歌つて、コジンスキイが伴奏をする丈だわ。」

「それ丈ではあるまい。」

「そりやあ、二人きりで旅をするのですもの。丸つきり無しといふわけには行きませんわ。」

「知れた事さ。そこで東京へも連れて来てゐるのかい。」

「えゝ。一しよに愛宕山に泊まつてゐるの。」

「好く放して出すなあ。」

「伴奏させるのは歌丈なの」 ベグライテン Begleitend といふ詞を使ったのである。伴奏ともなれば同行ともな

る。「銀座であなたにお目に掛かつたと云つたら、是非お目に掛かりたいと云ふの。」

「眞平だ。」

「大丈夫よ。まだお金は澤山あるのだから。」

「澤山あつても、使へば無くなるだらう。これからどうするのだ。」

「アメリカへ行くの。日本は駄目だつて、ウラヂオで聞いて来たのだから。當にはしなくつてよ。」

「それが好い。ロシアの次はアメリカが好からう。日本はまだそんなに進んでゐないからなあ。日本はまだ普請中だ。」

「あら。そんな事を仰やると、日本の紳士がかう云つたと、アメリカで話してよ。日本の官吏がと云ひませうか。あなた官吏でせう。」

「うむ。官吏だ。」

「お行儀が好くつて。」

「恐ろしく好い。本當のフィリステルになり済ましてゐる。けふの晩飯丈が破格なのだ。」

「難有いわ。」さつきから幾つかの控鈕をはずしてゐた手袋を脱いで、卓越しに右の平手を出す



のである。渡邊は眞面目に其手をしつかり握つた。手は冷たい。そしてその冷たい手が離れず  
にゐて、暈の出来た爲めに一倍大きくなつたやうな目が、ぢつと渡邊の顔に注がれた。

「キスをして上げても好くつて。」

渡邊はわざとらしく顔を蹙めた。「ここは日本だ。」

叩かずに戸を開けて、給仕が出て来た。

「お食事が宜しうございます。」

「ここは日本だ」と繰り返しながら渡邊は起つて、女を食卓のある室へ案内した。丁度電燈が  
ぱつと附いた。

女はあたりを見廻して、食卓の向側に据わりながら、「シヤンプル・セバレエ」と笑談のやう  
な調子で云つて、渡邊がどんな顔をするかと思ふらしく、背伸びをして覗いて見た。感花の籠  
が邪魔になるのである。

「偶然似てゐるのだ。」渡邊は平気で答へた。

シエリイを注ぐ。メロンが出る。二人の客に三人の給仕が付き切りである。渡邊は「給仕の  
賑やかなのを御覧」と付け加へた。

「餘り気が利かないやうね。愛宕山も矢つ張さうだわ。」肘を張るやうにして、メロンの肉を剝  
がして食べながら云ふ。

「愛宕山では邪魔だらう。」

「丸で見當違ひだわ。それはさうと、メロンはおいしいことね。」

「今にアメリカへ行くと、毎朝極まつて食べさせられるのだ。」

二人は何の意味もない話をして食事をしてゐる。とう／＼サラダの附いたものが出て、杯に  
はシヤンパニエが注がれた。

女が突然「あなた少しも妬んでは下さらないのね」と云つた。チエントラアルテアアテルがは  
ねて、ブリユウル石階の上の料理屋の卓に、丁度こんな風に向き合つて据わつてゐて、おこつ  
たり、中直りをしたりした昔の事を、意味のない話をしてゐながらも、女は想ひ浮べずにはゐ  
られなかつたのである。女は笑談のやうに言はうと心に思つたのが、圖らずも眞面目に聲に出  
たので、悔やしいやうな心持がした。

渡邊は据わつた儘に、シヤンパニエの杯を感花より高く上げて、はつきりした聲で云つた。

「*Kosinski soll leben!*」



凝り固まつたやうな微笑を顔に見せて、黙つてシャンパニエの杯を上げた女の手は、人には  
知れぬ程顫つてゐた。

\* \* \* \* \*

まだ八時半頃であつた。燈火の海のやうな銀座通を横切つて、エエルに深く面を包んだ女を  
載せた、一輛の寂しい車が芝の方へ駈けて行つた。

木 精

巖が屏風のやうになつて立つてゐる。登山をする人が、始めて深山薄雪草深山薄雪草の白い花を見付け  
て喜ぶのは、こゝの谷間である。フランツはいつもこゝへ来てハルロオと呼ぶ。

麻のやうなブロードな頭を振り立つて、どうかしたら羅馬法皇の宮廷へでも生捕られて行き  
さうな高音でハルロオと呼ぶのである。

呼んでしまつてちいつとして待つてゐる。  
暫くすると、大きい鈍いコントロールバスのやうな聲でハルロオと答へる。  
これが木精である。

フランツはなんにも知らない。只暖かい野の朝、雲雀が飛び立つて鳴くやうに、冷たい草叢  
の夕、蟬が忍びやかに鳴く様に、こゝへ来てハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へてくれ  
るのが嬉しい。木精に答へて貰ふ爲めに呼ぶのではない。呼べば答へるのが當り前である。日  
の明るく照つてゐる處に立つてゐれば、影が地に落ちる。地に影を落す爲めに立つてゐるので



はない。立つてゐれば影が差すのが當り前である。そしてその當り前の事が嬉しいのである。フランツは父が麓の町から始めて小さい杵を買つて来て穿かせてくれた時から、こゝへ来てハロオと呼ぶ。呼べばいつでも木精の答へないことはない。

フランツは段々大きくなつた。そして父の手傳をさせられるやうになつた。それで久しい間例の岩の前へ來ずにゐた。

或日の朝である。山を一面に包んでゐた雪が、巔に丈残つて方々の樅の木立が緑の色を現して、深い深い谷川の底を、水がごう／＼と鳴つて流れる頃の事である。フランツは久振で例の岩の前に來た。

そして例のやうにハロオと呼んだ。

麻のやうなプロンドな頭を振り立つて呼んだ。併し聲は少し荒あらいを帯びた次高音になつてゐるのである。

呼んでしまつて、ぢいつとして待つてゐる。

暫くしてもう木精が答へる頃だと思ふのに、山はひつそりしてなんにも聞えない。只深い深い谷川がごう／＼と鳴つてゐるばかりである。

フランツは久しく木精と問答をしなかつたので、自分が時間の感じを誤つてゐるのかと思つて、又暫くぢいつとして待つてゐた。

木精は矢張答へない。

フランツはぢいつとしていつまでもいつまでも待つてゐる。

木精はいつまでもいつまでも答へない。

これまでいつも答へた木精が、どうしても答へない筈はない。もしや木精は答へたのを、自分がどうかして聞かなかつたのではないかと思つた。

フランツは前より大きい聲をしてハロオと呼んだ。

そして又ぢいつとして待つてゐる。

もう答へる筈だと思ふ時間が立つ。

山はひつそりしてゐて、ごう／＼といふ谷川の音がするばかりである。

又前に待つた程の時間が立つ。

聞えるものは谷川の音ばかりである。

これまではフランツは只不思議だ不思議だと思つてゐたばかりであつたが、此時になつて急



に何とも言へない程心細く寂しくなつた。譬へばこれまで自由に動かすことの出来た手足が、ふいと動かなくなつたやうな感じである。麻痺の感じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツの頭に觸れたのである。フランツは麻のやうなブロードな髪が一本一本逆さに整つやうな心持がして、何を見るときもなしに、身の周匝を見廻した。目に觸れる程のものに、何の變つた事もない。目の前には例の岩が屏風の様立つてゐる。日の光がところ／＼霧の幕を穿つて、縦の木立を現はしてゐる。風の少しもない日の癖で、霧が忽ち細い雨になつて、今まで見えてゐた縦の木立が又隠れる。谷川の音の太い鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牝牛の頸に懸けてある鈴であらう。

フランツは雨に濡れるのも知らずに、ぢいつと考へてゐる。餘り不思議なので、夢ではないかと思つて見た。併しどうも夢ではなささうである。

暫くしてフランツは何か思ひ付いたといふやうな風で、「木精は死んだのだ」とつぶやいた。そしてぼんやり自分の住んでゐる村の方へ引き返した。

同じ日の夕方であつた。フランツはどうも木精の事が氣に掛かつてならないので、又例の岩の處へ出掛けた。

此日丁度午過から極軽い風が吹いて、高い處にも低い處にも團まるがつてゐた雲が少しづゝ動き出した。そして銀色に光る山の巔が一つ見え二つ見えて來た。フランツが二度目に出掛けた頃には、巔といふ巔が、藍色に晴れ渡つた空にはつきりと畫かれてゐた。そして斷崖になつて、山の骨のむき出されてゐるあたりは、紫を帯びた紅に勻ふのである。

フランツが例の岩の處に近づくと、忽ち木精の聲が賑やかに聞えた。小さい時から聞き馴れた、大きい、鈍が、コントルバスのやうな木精の聲である。

フランツは「おや、木精だ」と、覺えず耳を敬てた。

そして何を考へる隙もなく駆け出した。例の岩の處に子供の集まつてゐるのが見える。子供は七人である。皆ブリュネットな髪をしてゐる。血色の好い丈夫さうな子供である。

フランツはつひに見たことのない子供の群を見て、氣兼ねして立ち留まつた。

子供達は皆ちいつとして木精を聞いてゐたのであるが、木精の聲が止んでしまふと、又聲を揃へてハルロオと呼んだ。

勇ましい、底力そこぢからのある聲である。

暫くすると木精が答へた。大きい大きい聲である、山々に響き谷々に響く。



空に聳えてゐる山々の巔は、此時あざやかな紅に染まる。そしてあちこちにある樅の木立は次第に濃くなる鼠色に漬されて行く。

七人の知らぬ子供達は皆ぢいつとして、木精の尻聲が微かになつて消えてしまふまで聞いてゐる。どの子の顔にも喜びの色が輝いてゐる。其色は生の色である。

群を離れて矢張りいつとして聞いてゐるフランツが顔にも喜びが閃いた。それは木精の死なないことを知つたからである。

フランツは何と思つてか、その儘踵を旋らして、自分の住んでゐる村の方へ歸つた。

歩きながらフランツはこんな事を考へた。あの子供達はどこから來たのだらう。麓の方に新しい村が出來て、遠い國から海を渡つて來た人達がそこに住んでゐるといふことだ。あれはおほかたその村の子供達だらう。あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないので、木精が死んだかと思つたのは、間違であつた。木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。こんど呼んで見たら、答へるかも知れないが、もう廢さう。

闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、とう／＼闇に包まれてしまつた。村の家にちらほら燈火が付き初めた。

大發見

僕も自然研究者の端博はしくれとして、顯微鏡や試験管をいぢつて、何物をか發見しようとしてゐた事があつた。

併し運命は僕を業室から引きずり出して、所謂事務といふものを扱ふ人間にしてしまつた。二三の破格を除く外は、大學出のものに事務の出來るものはないといふ話である。出來ない事をするのも勤なれば是非が無い。そこで發見とか發明とかいふことには頗る縁遠い身の上となつた。

考へて見れば、發見とか發明とかいふ詞を今のやうに用ゐるのは、翻譯から出てゐるのだが、甚だ曖昧ではないかと思ふ。亞米利加を發見したとか、ラヂウムを發見したとかいふのは、あれは *Discovery* である。クリストバン・コロロンが出來て來なくても、亞米利加の大陸は元から横はつてゐたのだ。キュリー夫婦が骨を折らなくとも、ラヂウムは昔から地の底にあつて、熱を起したり、電氣を起したりしてゐたのだ。今まで有りながら、目に見えなかつたものを見えるや



うにする。衣被（ぎぬかぶり）を取つてお顔を拜ませる。これも發見發明である。

竹の臺に發明品博覧會があるなどいふのは、あれは又意味が違ふ。あれは何か今まで無かつたことを工夫したものを陳列して見せるのだ。さういふ新工夫をするのを、發明するといひならはしてゐる。意匠をするのである。創意をするのである。Eventするのである。これも發見發明といはれてゐる。

そこで洋語の未熟なものは、飛んだ間違つた話をして、西洋人に笑はれたり何かする。僕なんぞもさういふ目に逢つたことがある。發見といふ話をしようと思つて、一寸思ひ出したから、御丁寧なわけであるが、最初にことわつて置く。

僕は生れつき鈍い方であつて、新工夫なんぞをする機智には甚だ乏しい。又宇宙の祕密をあまくといふ（たぶ）側もさつき言つたとほり、最初に職業として、諸先生の下風に立つて、少し遣つて見たことがあるが、いつか運命が顕微鏡から僕の目を離させ、試験管を僕の手からもぎ取つてしまつた。旅行は僕はめつたにしない。北海道は函館より先を知らない。九州は熊本より先は知らない。滿洲や臺灣は戦争をする兵隊に附いて歩くので、職務の爲めに行かねばならない處まで行つたに過ぎない。歐羅巴は學問修行を申附けられて、獨逸へ行つて、歸りに倫敦と巴里

とを見たばかりだ。近頃評判のスエン・ヘデンやシャツクルトンのやうに土地を發見することも出来ない。

但し學者仲間に發見といふことが今一つある。これは俗に掘り出すといふのに當る。勿論これも *discover* なのである。坪井正五郎君などは、十字鉞や圓匙を使つて、正確な意義に於いて掘り出してをられる。僕の弟にも一人土器を掘り出して歩くのがある。隠居が骨董店を覗いてまはるのを、言語の轉用で、掘り出すと云つて、それからこの掘り出すといふ詞の意味が廣くなつた。こゝに古文書の掘出しといふものがある。僕の友人にもさういふ發見を遣つてゐる人が澤山ある。職業として遣る人は格別として、これは随分時間を要する爲事であつて、僕が端から見ると、釣をする人に似てゐるやうな心持がする。一體掘出しはのん氣な爲事に相違ないのだが、これも功名心が伴つて來ると、危険がないでもない。其邊は佛蘭西のアルフォンス・ドオデエといふ先生が不死者といふ本に十分書いてゐるから、僕は復た贅せずとして引き下る。この發見の方にも、僕は先づ縁が遠いやうだ。

然るに僕は此頃期せずして大發見をした。今その話をしようと思ふ。かう吹聴したら、諸君は頭から僕を法螺吹とせられることであらう。それも御尤である。大



發見。ちと大袈裟かな。併し大小なんぞといふのは比較の詞である。お山の大将も大将である。僕なんぞも文學の大家ださうだ。嘗に比較の詞であるのみでない。大小は又主觀的に物を形容することに使つても差支ないのである。子供に餡餅あんもちを遣らうと云へば、大きいのをと云ふ。大きいと云つたつて知れたものである。僕は主觀的に僕の爲た發見を大なりとするに過ぎないことを、前以てことわつて置く。主觀は私で、客觀が公だなどと云ふ。それはさうに相違ない。併し公平だ、客觀的だといふ觸込で書く批評なんぞといふものも、何だか餘り正直には受取りにくいやうだ。僕が僕の發見を大なりとするは固より私であるから、左様御承知を願ひたい。

僕が洋行した時の事である。僕は椋鳥として輸出せられて、伯林の眞中に放された。先から來てゐる方達が、何でも最初に公使に伺候せねばならないと云ふから、ドロシユケといふ辻馬車、しかも青硝子の嵌まつてゐる、がたびしするやつに乗つて出掛けた。

公使館はフオス町七番地にあつた。帝國日本の公使館といふのだから、少くも一本立の家で、塀もあるだらう、門もあるだらうなどと想像してゐたところが往つて見ると大違である。スウテレンには靴屋の看板が掛かつてゐる。その上ガバルテルである。戸口に個人の表札が打ち附けてある。今一つ階段を上る。そこが公使館であつた。這入つて見れば狭くはない。却つて

廣過ぎて、がらんとしてゐるやうな感じのする住ひであつた。

若い外交官なのだらう。モオニングを着た男が應接する。椋鳥は見慣れてゐるのではあらうが、なんにしる舞踏の稽古をした人間とばかり交際してゐて、國から出たばかりの人間を見ると、お辭儀のしやうからして變だから、好い心持はしないに違ない。なんだか穢きたい物を扱ふやうに扱ふのが、こつちにも知れる。名刺を受け取つて奥の方へ往つて、暫くして出て來た。

「公使がお逢になりますから、こちらへ。」  
僕は附いて行つた。モオニングの男が或る部屋の戸をこつくと叩く。

「ヘライン。」

恐ろしいバスの聲が戸の内から響く。モオニングの男は戸の握りに手を掛けて開く。一歩下つて、僕に手眞似で這入れと相圖をする。僕が這入ると、跡から戸を締めて、自分は詰所に歸つた。

大きな室である。様式はルネッサンスである。僕は大きな爲事机の前に立つて。當時の公使S.A.閣下と向き合つた。公使は肘を持たせるやうに出來てゐる大きな椅子に、ゆつたりと掛つてゐる。日本人にしては、かなり大男である。色の眞黒な長顔の額が、深く左右に抜け上がつ



てゐる。胡麻鹽の頬髯が一握程垂れてゐる。獨逸婦人を奥さんにしてをられるといふことだから、所謂ハイカラアの人だらうと思つたところが、大當違で、頗る蠻風のある先生である。突然この大きな机の前の大きな人物の前に出て、椋鳥の心の臓は、歟めたる翼の下で鼓動の速度を加へたのである。

「舊藩主の伯爵が、閣下にお目に掛つたら、宜しく申上げるやうにと、申す事でござりました。」

「うむ。伯爵も近い内に來られるといふではないか。」

「さやうでござります。何れお世話にならなければならんと申されました。」

「君は何をしに來た。」

「衛生學を修めて來いといふことでござります。」

「なに衛生學だ。馬鹿な事をいひ付けたものだ。足の親指と二番目の指との間に繩を挟んで歩いてゐて、人の前で鼻糞をほじる國民に衛生も何もあるものか。まあ、學問は大概にして、ちつと歐羅巴人がどんな生活をしてゐるか、見て行くが宜しい。」

「はい。」

僕は一汗かいて引き下つた。希臘人や羅馬人の畫にかいたのを見ると、紐で足に括り附けた

サンダルといふのを穿いてゐるが、なる程現今の歐羅巴に、足の親指と二番目の指との間に、繩を挟んで歩いてゐるものは無いに違ひない。但し鼻糞をほじつてはならないといふことは、僕はこれまで考へても見なかつた。人の話に、どこかの令嬢が見あひに行つて、鼻糞をほじつて、破談になつたといふことは聞いたが、それも令嬢で、場所が場所だから不都合であつたのだ位にしか思はなかつた。まあ、公使の前ではじらないで好かつたと思つたのである。

それから僕は稀逸に三年ゐた。學生に交際する。大相親切らしいと思つては、金を貸せと云はれてびつくりする。パンジョンの食堂に食事をして出る。一同にお辭儀をすると、ずらつと並んで腰を掛けてゐる男女のお客が一度に吹き出す。聞けば立つて禮をする法は、此國では中學時代に舞踏の稽古をするとき、をそはるのである。それだから僕のやうな無調法なお辭儀は見た事がないのだ。跡で人の好いお嬢さんが、責めて兩手に力を入れないで、自然の重りでもらつと下がつてゐるやうにして、體を眞直にして首をお屈めなさいと教へてくれた。大學の業室に出て、ベッヘルグラスの中へ硝子棒の短いのを取り落す。これはしまつたと、長い硝子棒を二本、箸にして、液體の底に横はつてゐる短い棒を挟んで、旨く引き上げる。さうすると、通り掛かつた教授が立ち留まつて見てびつくりして、どうしてそんな輕技かるわざが出来るのだと問ふ。



飯を食ふとき汁の實をはさむのと同じ事だから、輕技でも何でもないと答へると、教授が面白がつて、業室中にある學生を呼び集めて、今の輕技をもう一遍遣つて、みんなに見せて遣れと云ひ付ける。爲方しふたがないから、器うつはの儀は改めまして御覽に入れますとも何とも云はずに、同じ事を遣つて見せる。師弟一同野蠻人といふものは妙なものだと思ふ。併し負まけじ魂は底の方にあるから、程着なんぞも例の下駄や草履の端緒はなはと同じわけだと思ふ。併し負まけじ魂は底の方にあるから、何だ歐羅巴の奴等は日本人の臺所たいしよでする事をお座敷ざしきでするから、ナイフやフォオクが入るのだ、マリア・スチユアアト時代にはそのナイフやフォオクもまだ行はれないで、指で撮とまんて食つたといふではないかなどと、腹ではけなしてゐるのである。

僕は三年が間に、獨逸のあらゆる階級の人に交つた。詰まらない官名を持つてゐたお蔭で、王宮のアッサンブレエやソアレエにも出て見た。勞働者の集まる社會黨の政談演説會にも往つて見た。但し次の分は内證である。あの時は翌日新聞に書かれて、ひどく恐縮したつけ。

併し此三年の間鼻糞をほじるものには一度も出逢はなかつた。

獨逸から歸りがけには倫敦に立ち寄つて、鼯鼠もぐらのやうに地の底を潜かつて歩く地下鐵道の車にも乗つたが、鼻糞をほじるものには逢はない。巴里にも立ち寄つて、天を摩もするエツフェル塔

にも登つたが、鼻糞をほじるものには逢はない。

果せるかな、歐羅巴人は鼻糞をばほじらないのである。

一體鼻糞をほじるといふことは、我黨の士の平氣で遣る事ではあるが、餘り好い風習ではないやうだ。併し歐羅巴人がしないから、我々もしてはならないと云はれると、例の負けじ魂がむく／＼と頭を持ち上げて來て、僕にこんな議論を立てさせる。

そも／＼鼻糞は白哲人種せつじんなると黄色人種なるとを問はず、必然鼻の穴の中に形成せらるべきものである。然るに日本人がそれをほじつて、歐羅巴人がそれをほじらないのは何故であるか。汗を流す爲めに日本人は毎日湯に入る。歐羅巴人はシャツに吸ひ込ませて、度々シャツを着更へて、湯に入らずに済みます。ベツテンコオフエルは吾人の襦袢は吾人に代つて浴すと書いてゐる。鼻糞もこれに似たわけで、歐羅巴人は鼻の中がむづ痒くなつても、ハンケチで鼻をかんで済みます。まだ痒くても、鼻をこすつて済みます。矢張彼等のハンケチは彼等に代つて鼻糞をほじるのである。ほじらないまでも揉み潰すのである。

揉み潰すなんぞは姑息の手段である。ほじるのラヂカルなるに如かない。

まあ、こんな議論も立てたくないのである。序ついでだから言ふが、ハンケチを用ゐるなんぞとい



ふ風習は不潔極まる風習である。度々鼻をかんでは、ポケットの中にしまつて置く。ポケットの中で、鼻涕はなしろの水分と共に揮發分が、肌の温みで蒸散して、羅紗を通して外へ出る。其揮發分の一部は羅紗の質の中に残つて溜まる。羅紗は、諸君も御承知の如く、洗濯が利かない。たまたま赤羽の何とかいふ店のやうに、羅紗を洗濯したり、丸染にしたりしてくれるといふので、すばらしい好男子と別品さんが、羅馬人の拵へたヤヌスの神の像の様に、背中合せにくつ附いてゐる大看板を辻々に立てるから、僕のやうな貧乏人は、締めたと思つて、去年の暮にずぼんを二つ頼んだところが、何漏催促しても、ずぼんは取り放しで歸してはくれない。要するに羅紗は穴があいて着られなくなるまで、淨めることの出来ないものである。ブラシ位でこすつたつて、地質に沁み込んでしまつた汗の揮發分も、鼻涕の揮發分も、永遠に取れない。此處で一斗活板屋に注意して置くが、しみると云ふ字はさんずるに心といふ字を植ゑてくれ給へよ。三ずるに必ずといふ字を植ゑるのではないよ。分泌の泌の字を植ゑるのではないよ。こなひだ鼻はなに沁すみるといふ字の議論を書いて、誤植をせられて、何の事だか分らなくなつたから、念の爲めことわつて置くよ。

話が横道に這入つたが、兎に角ハンケチは不潔極まる物だ。それよりは鼻紙の方が適に清淨だ。使つたのは棄てるからね。此頃結核を豫防する一手段として、ハンケチの代りに紙を使つて棄てるが好いと、發明らしく書いてゐる學者があるが、何もこれは結核の豫防に限つた事ではない。曉ること既に老晩しと謂ふべしだ。

議論は議論として置いて、僕はとう／＼西洋人の鼻糞をほじるのを目撃せずにはしまつた。なる程目撃はせずにはしまつた。併しまだ載籍に徴しては見ない。尤もホメロスのエポスを見ても、ダンテのコメヂヤを見ても、鼻糞をほじる事はないやうだ。シエクスピアにもない。コルネイユやラシイヌにもない。ギョオテにもない。シルレルにもない。イブセンにもない。マアテルリンクにもない。かういふものに無い位であるから、正史には勿論無い。古來宮廷のイントリグや戦争の勝敗なんぞばかりを書くのが忙しくて、それも粗筋をやつと書いて行くのだから、拿破崙がモスクワのクレムルで、鼻糞をほじりながら思案に暮れたとも何とも書いてはない。

所詮白哲人種が鼻糞をほじつたといふことは、正確に證明することが出来ないらしい。僕は一時殆ど絶望したのである。

兎角する程に年月が立つ。僕は役所へ往つたり來たりするうちに、髭に白い筋が殖えて、内



職の文藝も耕さない荒地のやうになつた。「彼は文壇を去つた」、「彼の時代は過ぎ去つた」と、一度書かれ二度書かれするうちに、いつか有れども無きが如く、生きてゐても死んでしまつたやうになつて、たま／＼新聞なんぞを手を取つて見ると、何某の時代にはかうであつたといふ昔話の中に自分の名が出て来る。それでどうかした拍手で何か書く。同じ月に人の書いたものは囁語なげごとのやうな物まで批評が出る。自分の物丈は選つて除けたやうに批評が出ない。これが黙殺といふのださうな。かうなつてしまつても、體なまだけは生々しく生きながらへてゐる。器械的に寝たり起きたり、電車の弔革にぶらさがつたりして、東京といふ人の海の渦巻の間に出没してゐる。そして西洋人が鼻糞をほじるといふことは、終に未だ發見しないのである。

基督曆一九〇八年と算する頃になつて、獨逸から取り寄せて見てゐる新聞雜誌の中に、グスタフ・キイドといふ名が頻に見えて来るやうになつた。それより前に獨逸では、外國の詩人としてオスカア・ワイルドが流行はやりつた。バアナアド・シヨオが流行はやりつた。今度はキイドが流行はやり兒になつたらしい。

キイドは璉馬の人である。頗る奇警な自傳を書いてゐるのが左の通である。

「おれは一八五八年三月六日に軽い産でひよつくり生れた。一八七二年に堅振けんしんを受けた。書肆

になつた。一八八〇年に卒業試験に落第した。一八八一年に辯護士の事務所には雇はれた。一八八二年に二度目に落第した。一八八三年に家庭教師になつた。一八八四年にはブラアガアルドにある師範學校での一日の記念がある。一八八五年に大學々生になつた。一八八六年に哲學科の受験生になつた。一八八七年に人の家を教へて歩く時間割の教師になつた。一八八七年に詩人になつた。一八九〇年の劇場で口笛を吹かれた。一八九一年に監獄にゐた。一八九六年に妻を持つた。子を拵へた。家を立てた。追つて一九二七年四月十二日には、家内ぢゆうのものどもに惜まれ哭せられて死ぬるであらう。」

キイドが書いたものの中で、最も名高いのは、昨年あたり盛に所々で興行せられてゐたにんじん「が」といふ脚本である。一の諷刺劇である。しかも主人公は自分らしい。主人公の教員が思ひ切つて進歩的な事を書く。免職になる。地方長官の御覺ごきやくのためだいたい保守黨の外舅しよとに女房を取り戻しに來られる。そこへ昔馴染のじだらくな女が來てちやほやする。忽ち巡查が來て拘引して行く。監獄にゐる。その間に地方長官の更迭がある。進歩黨の長官が出来る。外舅が進歩主義になつて、監獄へ面會に來て、どうぞ娘をもう一遍妻に持つてくれと歎願する。監獄から出て見ると、内は大變な始末になつてゐる。例のじだらくな女が情夫を引つ張り込んで、婆あさんの



女中を追ひ廻して、我家らしく暮してゐる。情夫は馬券の賣買か何かをしてゐるといふ性の男である。此三人の會話が尤妙である。情夫の放浪的な恬然たる言草も好い。女のずるい癖に非常に狼狽して、出来ない申しわけをするのも好い。主人が戸口に突立つた儘、始終無言であつて、とう／＼二人を手眞似で追ひ出すなどは、尤振つてゐる。元の女房が戻つて来る。麵包にありつくには、昔の恩人たる某伯爵夫人のお情で、保守黨新聞の主筆になるより外致方がない。何故、外舅の保守主義は進歩主義になつたか。Conservativeである。何故主人の進歩主義は保守主義になつたか。Conservativeである。Conservativeの意味はざつとこんなものである。

此脚本を始として、今日まで川板になつた作が十三種程ある。僕は先頃からそれを讀んでゐる。讀んで行くうちに、「手紙の往復」と題した短篇になつた。これは借家人の煙草屋が家主と手紙の往復をして、とう／＼家主をへこます話である。煙草屋アアベルは得意で此話をするのを、店の賣草の前に坐つて、柔い帽子を阿彌陀に被つた船頭ハアルリヨフが聞いてゐる。聞きながら、此船頭は何をするか。嗚呼、此船頭は何をするか。

僕はキイドをして自ら語らしめるであらう。

「彼はをり／＼何物をか鼻の中より取り出ししてゐる。さてその取り出した結果を試験する爲め

に、鼻の穴の中に一ぱい生ひ茂つてゐる白い毛を戦がせて、彼は空氣を通過させて見てゐる。」讀者はクリストバン・コロンが望遠鏡の中に、白玉盤上一點の青螺を認めた時の心持はどうであつたと思ふか。キユリイ夫婦が幾桶かのヨアヒム谿谷の鑛屑を製鍊し盡して、一ちよぼのラヂウムを獲た時の心持はどうであつたと思ふか。發見者になつて見なくては、發見者の心持は知れないであらう。

發見は力づくでは出来ない。一目の羅は鳥を獲ず。鳥を獲る羅は唯だ是れ一目である。

併し始から羅を張らなくては、鳥は獲られない。脚氣の病原はなか／＼櫻まらなくても、脚氣調査會といふ羅は張つて置かねばならない。

僕は晝飯の辨當に、食麵包に砂糖を附けて齧つてゐる。馬の外は電車にしか乗らないで、跡はて／＼歩いて、月給の大部分を書物にして讀んでゐる。そのお蔭で、是の如く歐羅巴人の鼻糞をほじるといふ大事實を、最も明快に、最も的確に、毫釐の遺憾なく、發見し得たのである。歐羅巴の白哲人種は鼻糞をほじる。此大發見は最早何人と雖、抹殺することは出来ないであらう。

前の伯林駐劄大日本帝國特命全權公使子爵 S.V. 閣下よ。僕は謹んで閣下に報告する。歐羅巴



人も鼻糞をほじりますよ。

これを書いた後に、Leonid Andrejev の「七人の戮せられたもの」といふ小説を讀んで見ると、これにも主人を小刀で刺した百姓 Iwan Jansson が法廷で、節搦立つた指で、鼻の穴を掘つてゐるといふことが書いてあつた。ろすけも矢張ほじくると見える。

# 電車の窓

冬の午後四時半である。

時によると恐ろしく電車の支へてゐることのある停留場なのに、どうしたわけか、往く車も返る車も暫く絶えてある。

赤と青の旗を巻いて、きたない外套のポケットに挿した男が、ぼんやりポストの傍に立ち竦んでゐる。

ここは屋敷町である。

四條の線路が三方に分かれて、長く寂しく横はつてゐる上を、をり／＼風がさつと渡ると、黄いろい砂埃がむら／＼と起つて、横に這つて消えてしまふ。

車を待つてゐるものは、おぼひ遅退の屬官らしい男が二三人、絆纏を着た職人が一人、お互に顔を見合ふのも面倒だといふ風をして、はなれ／＼に立つてゐる。

この人達と反對の側には、女が一人俯向き加減になつて、両袖を掻き合せて立つてゐる。鼠



の縞羅紗のコートの袖である。

銀杏返しのほつれ毛が縹色のショオルの上に翻れ掛かっている。

僕の乗らうと思つた方向は、女の立つてゐる側なので、ずっと背後の方に離れて立ち留まつて、もう車が来さうなものだと、坂上の方を見てゐた。

電車はなか／＼来ない。

ふいと横町から自動車飛び出して来て、ぶつぶつぶつと、厭な音をさせて線路を横ぎつて行つた。

青い、臭い煙がきれ／＼にその跡に残る。

女が一足二足退く拍子に、僕は女の顔を見た。美しいが、殆ど血の色のない、寂しい顔である。

女の目も始めて僕といふものの存在を認めた。

亘の長い目で、瞳が黒い星のやうに輝いた。

この目がこんな事を言ふのである。「あなたも千萬人の男といふものの中のお一人でございますね。多分わたくしの事を一寸好い女だと思ひでございませう。そして好い女だが、關れてゐるとお思ひでございませう。事に依つたら、わたくしの様子を御覽なすつたばかりでも、わた

over  
center  
right  
left

くしの胸にせつない事のあるもお分かりでございませう。でも、わたくしの胸にある事は、誰にでも慰めて貰はれるやうな事ではございせん誰にでもではございせん。永遠に誰にも慰めて貰ふことの出来ない事なのかも知れません。ですから、わたしの顔なんか御覽なさることはお廢なさいまし。駄目でございますから。」

僕は坂の上を見た。夕日の橙黄色に残つてゐる空に透かして、最初に觸角を現はして、それから甲らを出して、胴を出して、這ひ寄つて来た電車が見える。電車は薄黒く見えてゐる。

針金がしゅうと鳴り出す。それからこうといふ音がする。やうやう其札に丁度僕の志ざす先が書いてあるのが讀めた。

ちんちんと云つて、停留場に来て留まつた。客が二三人降りた。

女が乗りさうにするので、僕は一足後れて車の傍に歩み寄つた。

運轉手のゐる方の入口である。

正面の窓の處に席が明いてゐたので、女はそこに掛けた。

掛けると、鼠のコートの袖を掻き合せる。これが癖と見える。頭は相變らず俯向加減になる。

僕は直前の革にぶら下がつた。



女の頭が僕の腮の處にある。象牙に何か假名文字の蒔繪をした櫛と、翡翠の玉の附いた燻しの釵とが目につく。黒く光る、筋の太さうな髪である。

車掌の鈴が唱へて、運轉手の鈴が和する。車がすうと動き出す。

どつどつと衝き上げるやうな音がして、ごうと地鳴がする。どつどつ、ごう、どつどつ、ごう。車は次第に速度を加へる。

僕は櫛の蒔繪の文字を讀まうとしたが讀めない。隙間風が横に吹いてゐるのに、ふいと髪の毛の匂がして、忽ち消えた。

「鏡花の女だ。」腹の中で僕はかう思った。どつどつ、ごう。どつどつ、ごう。

車の窓の外は、青み掛かつた鼠色に、あらゆる物が浸されてゐる。

役所や大きな屋敷の前に行く。

往來は極少い。をり／＼遅退の屬官らしいのが通る。中に一人、短い外套から、瘦せた首が斜に前上方に突き出されて、長い細い足が二本、參謀官の兩脚規が地圖の上を歩くやうに、歩

いてゐる男がある。その姿を見ると、毛を引いた暹羅雞が思ひ出される。

忽ち窓の外が一ぱいの赤い幟になる。俱樂部洗粉の広告隊である。人足は赤地に白く洗粉の名を出した引廻しのやうな物を着てゐる。車ちゆうの目が一瞬間悉く赤い幟に注がれる。

一瞬間である。電車は早いの、広告隊も急ぎ足で通り過ぎる。こんな處には廣告の甲斐はない。或る方面を歩いた歸道であらう。

赤い幟を見送らない人が只一人ゐる。それは鏡花の女である。

鏡花の女は矢張鼠のコオトの袖を掻き合せて、俯向加減になつてゐる。

その姿勢がこんな事を言ふのである。「まあ、なんといふ詰まらない身の上だらう。こんなに大勢の人が此電車に乗つてゐても、わたしがこれから行つて鬨を跨がねばならない家のやうな家に行く人はあるまい。わたしがこれから行つて詞を換はさなくてはならない人達のやうな人と話をする人はあるまい。それでも其家に行かないわけには行かない。その人達と話をしてわけには行かない。なんといふ詰まらない身の上だらう。それに内を出れば、道を歩いてゐても、電車に乗つてゐても、人がいやに顔を見る。それも只當り前に行き逢つた人の様に、見るともなしに見るばかりなら好い。摩れ違つてから振返つて見る。連のある人は連に何かささや



く。一頃はそれが嬉しかった事もある。それが嬉しいので、誰の爲めといふこともなく、身じまひをした。着物や髪物の物に氣を附けた。あの頃の事を思へば、本當に氣樂だつた。向ひに二人並んで腰を掛けて、何か話し合つては、くすくす笑つてゐる廂髪なんぞは、おほかたわたしのあの頃のやうな心持でゐるのだらう。もう一度あんな心持になつて見たい。」

電車は兩側に店のある町に出た。

ちんくといふ車掌の合圖で、電車は留まつた。

二三人降りて二三人乗る。前の方からも降りる人があるので戸が開く。冷たい風が砂埃を吹き込む。僕は體を横にして降りる人を通して遣つた。併し此停留場での客の昇降は、僕の革に吊り下がつてゐる一角には、格別變動をも來さなかつた。

ちんく。ちんく。電車が又動き出した。どつどつ、ごう。

店に明りの附いたのが段々多くなる。街燈が附く。繁華な通りも人通りは少い。どこでも夕飯を食ふ刻なのである。

電車にぼつと明りが附いた。

或る町の角を電車が鋭く曲つた。

鏡花の女が一寸肩をゆさぶつて頸を縮めた。雷車が角を曲つたので、女の背後うしろの開いてゐた窓から、冷たい風が吹き込んで來たのである。

女は買った儘で、指尖で撮まんで持つてゐた切符を帯に挟んで、身をよぢつて、背後の窓を締めようとした。

締まらない。どこか引つ掛かつてゐるやうである。

女は立つて、膝を腰掛の縁に當てがつて、兩手を窓の戸に掛けて、引き上げようとした。

髪のはつれ毛がはらくと動いた。

窓の戸は上がらない。

女の身をよぢつた時から、瘦せた、しなやかな體の運動を眺めてゐた僕は、女が細い片手を窓に掛けた時、締めて遣らうかと思つた。

併し何物かが僕の肘を掣してゐたのである。

女に手を借すのがハイカラらしいのを嫌つたわけではない。女の隣に、二人分以上の幅を取つて、坐を占めて、毛皮の襟の附いた大外套の中に體を埋めてゐるやうな男の、手を出すのを待つてゐたわけでもない。



どうも鏡花の女は人の助を借るのを厭ふらしく思はれてならなかつたのである。

窓の戸は上がらない。

僕は黙つて伸ばした右の手を窓の戸に掛けた。窓はわけなく締まつた。

「憚様。」

思の外に力のある、はつきりした聲である。そして窓から手を放して、振り向きしなに、黒い星のやうな瞳が電灯の下で、一秒時の分數ほどの間、僕の顔の上に息んでゐた。

女の唇の語つたのは、只「憚様」の一語であつたが、その瞳はそれより多くのものを僕に語つたのである。「あなたの手を借して下すつたのは、わたくしだから手を借して下すつたのではございません。併し丸でわたくしだから手を借して下すつたのでないのでもございます。あなただつて、あの開いてゐた窓をしめようとしてゐたのが誰であつても、きつと手を借してお遣なすつたといふわけでもございます。わたくしはどういふ側でああなたのお目に留まつたかは存じませんが、兎に角車に乗ります前からお目に留まつて丈けはりましたのでせう。あなたほどのお方だか好くは分かりません。併しどうもこれまで暗い横町で摩れ違つたとき手を握つたり、往來の少い處で聲を掛けたりした、何百人かの男とは違つて入らつしやるやうで

ございます。あなたは手を借して置いてどうするといふお考はおありなさいませう。あなたのがなすつた事は報の爲めになすつたものではございます。事によつたら、わたくしのどこかがお氣に召して、お慰になつた報だと仰やるかも知れませんが、それは報の爲めになすつたといふものではございません。何事を致すにも、その位の機勢はなくてはなりません。それは報の爲めとは申されませう。若しそんな機勢もなくして何か致すのが宜しいのでございませう。それは理屈があつて、思慮があつて致すので、その致す事が温みのないものになつてしまひませう。あなたが報の爲めではなく、わたくしにお手をお借しなすつたのが、わたくしは嬉しうございます。わたくしにはあれ丈の事も、世の中にまだ身勝手や慾心からでなく、何かしらする人のある兆のやうに思はれます。これから厭な内へ參つて、厭な人達に物を言はなくてはならないわたくしには、それ丈の信仰でも、餘程力になるのでございます。」

瞳がかう云つた迹で、不思議な事には、それまで俯向いてばかりゐた鏡花の女が頭を擡げてゐた。兩袖は相變らず掻き合せてゐるが、頭を擡げてゐる。その視線は水平になつてゐる。

向側にゐる廂髪の二人は、新しく乗つた人をでも見るやうに、鏡花の女を見た。そして隣同志目で相圖をしてゐる。



ちん／＼。ちん／＼。電車は或る廣場の停留場に来て留まつた。

僕は、大勢の客と一しよに、鏡花の女を跡に残して置いて、電燈の光の簇かつてゐる中に降り立つた。

廂髪の二人もここで降りたが、互に肘で突つ突き合つて囁いで、それから聲高に笑ひながら、忽ち人込に隠れてしまつた。

追 儼

悪魔に毛を一本渡すと、靈魂まで持つて往かすには置かないと云ふ、西洋の諺がある。

あいつは何も書かない奴だといふ善意の折紙でも、何も書けない奴だといふ悪意の折紙でも好い。それを持つてゐる間は無事平穩である。そして此二つの折紙の價値は大して違つてはゐないものである。

ところがどうかした拍子に何か書く。譬へば人生意氣に感ずといふやうな、おめでたい、子供らしい、頗る sentimental なわけで書く。さあ、書くさうだなと云ふと、こゝからも、かきこからも書けと迫られる。

どうして何を書いたら好からうか。役所から歸つて來た時にはへと／＼になつてゐる。人は晩酌でもして愉快に翌朝まで寐るのであらう。それを僕はランプを細くして置いて、直ぐ起きる覺悟をして一寸寐る。十二時に目を醒ます。頭が少し回復してゐる。それから二時まで起きてゐて書く。



晝の思想と夜の思想とは違ふ。何か晝の中解決し兼た問題があつて、それを夜なかに旨く解決した積で、翌朝になつて考へて見ると、解決にも何にもなつてゐないことが折々ある。夜の思想には少し當にならぬ處がある。

詩人には Balzac のやうに、夜物を作つた人もある。宵に寐かして置いた Lassally が午前一時になると喚び起される。Balzac はかう云つたさうだ。君はまだ夜寐る悪癖が已まない。夜は爲事をするものだ。さあ、ここに咖啡がある。これを飲んで目を醒まして、爲事に掛かり給へといふ。卓の上には白紙が疊ねてある。Balzac は例の僧衣を着て、部屋の中をあちこち歩きながら口授する。Lassally はそれを朝の七時まで書かせられるのであつたさうだ。併し Balzac は午前八時から午後四時まで役所の事務を執つてはゐなかつた。そこを思ふと僕の夜思想はいよ／＼當にならなくなる。

先づ兎も角も机に向つて、筆を手にとつて、何を書かうかと考へる。

小説にはかういふものをかういふ風に書くべきであるといふ事を聞せられてゐる。しかも抒情詩と戯曲とでない限の作品は、何でも小説といふ概念の中に入れられてゐるやうだ。戯曲などにはそんな註文がないが、これは丸で度外視せられてゐる爲めであるらしい。

そのかういふものをかういふ風に書くべきであるといふ教は、昨今の新發明でもあるやうに説いて聞せられるのである。随つてあいつは十年前と書振が變らないといふのは、殆ど死刑の宣告になる。

果してそんなものであらうか。Stendhal は千八百四十二年に死んでゐる。あの男の書いたものなどは、今の人がかういふものをかういふ風に書けといふ要求を、理想的に満足させてゐるしないかとさへ思はれる。

凡て世の中の物は變ずるといふ側から見れば、刹那々に變じて已まない。併し變じないといふ側から見れば、萬古不易である。此頃囚はれた、放たれたといふ語が流行するが、一體小説はかういふものをかういふ風に書くべきであるといふのは、ひどく囚はれた思想ではあるまいか。僕は僕の夜の思想を以て、小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだといふ斷案を下す。

Carnival の祭のやうに、毎年選んだ王様を擔いで廻つて、祭が過ぎれば棄てて顧みないのが、眞の文學發展の歴史であらうか。去年の王様は誰であつたか。今年の王様は誰であるか。それを考へて見たら、泣きたい人は確に泣くことの出来る處があるが、同時に笑ひたい人は確に笑



ふことの出来る處がありはすまいか。

これは高慢らしい事を書いた。こんな事を書く筈ではなかつた。併し儘よ。一旦書いたものだから消さずに置かう。

Strindberg に死人の踊といふ脚本がある。主人公の Edgar といふ男は、幕が開くといきなり心臓病の發作で死んだやうになる。妻が喜ぶ。最後に幕になる前に、二度目の發作で本當に死ぬる。初に死んでから後に、Edgar は名聞を求める。利欲に耽る。それが本當に死ぬまで已まない。それが死者の踊である。僕に物を書けといふのは、死者に踊れと云ふやうなものではあるまいか。

僕はふと思ひ出した事があつて、明けて置いた初の一行に「新喜樂」と書いた。そしてこれは廣告した時、引力のありさうな題號だと思つた。此頃物を書いて人の注意を惹かうといふには、少し *eye* の氣味を帯びてゐなくてはだめなやうだ。併し雑誌の體面といふものがある。僕はさう思つて、新喜樂の三字に棒を引へて、傍へ「消離」と書いた。これなら少くも眞面目に見える。

僕は豆打の話をしようと思ふ。そして其豆打は築地の新喜樂での出来事なのである。そして

僕が此話をする事の出来るのは、M. F. 君のお蔭である。

僕は追離と書いた左傍に、「M. F. 君に獻ず」と書かうかと思つた。書籍に dedicate するといふことがある以上は、雑誌の中に書いたものにもそれがあつても好くはあるまいか。「翻譯の權利を保留す」、「轉載を禁ず」などは、雑誌にも随分あるではないか。併し謹嚴といふ字を僕の形容に使ふことに極めてゐる新聞記者諸君が狼狽しては氣の毒だと思つて止めた。

M. F. 君は劇談會で二三度出會つた人である。二月三日の午後六時に、僕を新喜樂へ案内した。活板の案内狀に、何某も呼んであるから來いといふ書添がしてあつた。所謂何某が女性の名や何ぞでないことは、僕を呼ぶのであるから言ふことを待たない。

役所は四時に引ける。卓の上に出してある取扱中の書類を、非常持出の筆筒にしまつて鍵を掛ける。帽を被る。刀を巾る。雨覆を着る。いつもと違つて、何となく氣が引き立つてゐる。いつもでも内へ素直に歸られる日は少い。宴會は澤山ある。二箇所を斷つて一箇所に往くといふやうな日もある。併しいつも往く所は極まつてゐる。偕行社、富士見軒、八百勘、湖月、帝國ホテル、精養軒杯といふ所である。下つては寶亭、富士見樓などといふこともある。併し新喜樂とは珍らしい。常磐、小常磐、飄屋なんぞは稀に往くことがある。新喜樂に至つては、丸



で未知の世界である。新喜樂に往くといふのは、知らぬ處に通ずる戸を開けるやうで、何か期待する所があるやうな心持である。

女の綺麗なのがあるだらうと思ふ爲めではない。今の自然派の小説を見れば、作者の空想はいつも女性に支配せられてゐるが、あれは作者の年が若いからかと思ふ。僕のやうに五十近くになると、性欲生活が生活の大部分を占めてはゐない。矯飾して言ふのではない。矯飾して、それが何の用に立つものか。

只未知の世界といふことが僕を刺戟するのである。譬へばまだ讀んだ事のない書物の紙を紙切小刀で切る時の感じの如きものである。

役所を出て電車に乗る。灰色の空から細い雨が折々落ちて来る日である。電車の中で讀む本を用意してゐるが、四時過の電車ではめつたに讀めない。

本願寺前で降りる。大抵此邊だらうと思つて、堀ばたの方へ向いて、一軒一軒見て往く。小綺麗な家に堀越といふ標札がある。二三度逢つた事があるので、こゝにゐるなと思ふ。長靴をよごすまいと思つて飛び／＼歩く。

とう／＼新喜樂を見付けた。堀ばたの通に出る角の家であつた。格子戸の前で時計を見る。

馬鹿に早い。まだ四時三十分だから、約束の時間までは、一時間半もある。

格子戸をはいる。中は叩きで、綺麗に洗つてある。泥靴の痕が附く。嫌な心持がする。早過ぎることわりを言つて上ると、二階へ案内せられる。

東と南とを押し開いた、縁側なしの廣間である。西が床の間で、北が勝手からの上り口に通ずる。

時刻になるまで氣長に待つ積で、東南の隅に胡坐をかいた。

家が新しい。疊が新しい。疊に焼焦しが一つないのは、此家に来る客は特別に行儀が好いか知らんなぞと思ふ。兎に角心持が好い。

女中が茶と菓子とを運んで来る。笑つたり餘計な事を言つたりせずに行くのが氣に入る。着ものも沈黙の色であつた。

茶を飲んでしまふ。菓子を食つてしまふ。持つてゐた本を引繰返して見たが讀む氣にもならない。葉巻を出して尻尾を咬み切つて、頭の方を火鉢の佐倉に押付けて燃やす。

周圍がひっそりとする。堀ばたの方の往來に足駄の音がする。丈の高い HASSIVE な障子の、すわつて腋の届くあたりに、開閉の出来るやうに、小さい戸が二枚づゝ嵌めてある。それを開



けて見たが、横町へでも曲つたと見えて、人は見えない。總ての物が灰色になつて、海軍の参考品陳列館のけばくしい新築までが、その灰色の一刷毛をなすられてゐる。兵學校の方から空車が一つ出て来て、ゆる／＼と西の方へ行つた。

戸を締める。電灯が附く。僕は烟草をふかしながら座敷を見て、かう思つた。廣い、あかるい、綺麗な間で、なんにも目の邪魔になるものが無い。嫌な額なんぞも無い。避くべからざる遺物として床の間はあつても、掛物も花も目立たぬ程にしてある。胡坐をかいて旨い物を食つて、藝者のする事を見てゐるには、最も適当な場所だ。物質的時代の日本建築はこれだと云つても好からう、といふやうな事を思つた。

此時僕のすわつてゐる處と diagonal になつてゐる、西北の隅の襖がすうと開いて、一間にはいつて来るものがある。小さい萎びたお婆あさんの、白髪を一本並べにして祖母子に結つたのである。しかもそれが赤いちやんちやんこを着てゐる。左の手に柎をわき挟んで、ずん／＼座敷の眞中まで出る。すわらずに右の手の指尖を一寸疊に衝いて、僕に挨拶をする。僕はあつけに取られて見てゐる。

「福は内、鬼は外。」

お婆あさんは豆を蒔きはじめた。北がはの襖を開けて、女中が二三人ばら／＼と出て、籬れた豆を拾ふ。

お婆あさんの態度は極めて活々としてゐて氣味が好い。僕は問はずして新喜樂のお上なることを曉つた。

Nietzsche に藝術の夕映といふ文がある。人が老年になつてから、若かつた時の事を思つて、記念日の祝をするやうに、藝術の最も深く感ぜられるのは、死の魔力がそれを籠絡してしまつた時にある。南伊太利には一年に一度希臘の祭をする民がある。我等の内にある最も善なるものは、古い時代の感覺の遺傳であるかも知れぬ。日は既に没した。我等の生活の天は、最早見えなくなつた日の餘光に照らされてゐるといふのだ。藝術ばかりではない。宗教も道德も何もかも同じ事である。

暫くして M. F. 君が来た。いつもの背廣を着て来て、右の平手を背後に衝いて、體を斜にして雑談をする。どうしても人魚を食つた嫌疑を免れない人である。

僕は豆打の話をした。

「さうか。それは面白い。みんなが来てからもう一遍遣らして遣る。」



それからみんなが来た。いづれも福々しい人達であつた。選抜セクトウの藝者が客の數より多い程押し込んで来た。

二度目の豆打は餘り注意を惹かずにしまつた。

話はこれ丈である。批評家に術學の悪口といふのを浚ふ機會を興へる爲めに、少し書き加へる。

追儼は昔から有つたが、豆打は鎌倉より後の事であらう。面白いのは羅馬に似寄つた風俗のあつた事である。羅馬人は死靈を Lemur と云つて、それを追ひ退ける祭を、五月頃眞夜なかにした。その式に黒豆を背後うしろへ投げる事があつた。我國の豆打も初は背後へ打つたのだが、後に前へ打つことになつたさうだ。

## 懇親會

赤坂八百勤の廣間である。電燈が蹄鐵形にすわつた客の一群を照してゐる。蹄鐵の一脚は床の間を背にしてゐる。他の一脚と兩脚を繋ぎ合せた處とは、縁側をしきる障子を背にしてゐるのである。

軍服とフロックコートとジャケットと羽織袴と着流しと、次第もなく入り亂れてゐる。客は僕等將校と新聞記者とである。饌の上の物は誰のも大いに荒されてゐる。酒はそろ／＼爛ざましが雜つて來ても味神經の識別が怪しくなつてゐるのであらう。

饌を隔てゝ對壘して頬に杯の遣取をしてゐるものもある。客と客との間に割り込んで三味線をかぢや／＼無法に鳴らしてゐる藝者もある。

酌は大抵女中がする。お酌の友禪は一塊になつて、何やら饒舌つてゐてその中からをり／＼思ひ出したやうに一人立つて銚子を更へに行くのである。

曇つた冬の日が暮れてからは、溜池の方角に向いてゐる障子の外は、ひっそりしてゐるが、



一間のうちは火鉢のほてりと烟草の烟とが一ぱいになつてゐて、その中をお酌の甲走つた聲から某少將のバスまでの、あらゆる高低の音波が縦横に馳せ違ひ、截り合つて、障子の外へ出たが出られぬといふ風に悶えてゐる。かのがぢや／＼いふ三味線はその伴奏をなしてゐるのである。

僕は床の間に遠い方の隅にすわつて、酒が飲めないからサイダアを飲んでゐた。さつきから、國民新聞の記者で、徳富蘇峰君の若い時に酷く肖てゐる少年が隣へ来て、小説の自然主義の事を話してゐた。周囲がやかましいから、話は顔と顔を押し附けるやうにしなければ出来ないのである。

その少年が立つて行くと、跡へ色の白い、濃い髪がかつきりと狭い額を圍んでゐる、目に少し眇のやうな處のある、どこかの記者が来て、僕の左隣に坐を占めて、僕にいろ／＼な事を言つて聞かせてくれた。

「そも／＼懇親會なるものは、いかなる性質のものであるかといふ事に就いて、我輩の所見を吐露したのである。懇親會の本義本體を了解せずして懇親會に臨んでは、よしや其人は懇親會に臨んでも、恰も猶懇親會に臨まざることである。果して此の如き人物が有るとすれば、

我輩は恬然として、此般の没分曉漢と席を分つる榮を荷ふに忍びないのである。」

まあ、こんなやうな事を言つてゐる。此男の聲は好く通る聲で聞き取るには骨は折れない。併し耳に骨が折れない代りには、悟性に骨が折れる。かういふ話に頓挫抑揚を附けて聞せられる、その賑やかな音響の中から何等かの概念を覚め出さうとして、僕の悟性は非常に苦しみを覚えるのである。さて稍暫くその苦しさを忍んでゐたが、とう／＼何の概念をも含蓄してゐないといふことを發見したので、僕は大いに安堵した。

「君は僕の此意見を首肯せられるではありません。恐らくは君と雖、これを否定することを敢てせられないであります。若し然るにも拘らずして、君が敢てこれを否定せられるとならば、僕は更に大いに説明の勞を取らざることを得るのである。」

といふ様な事を言ふ時には、僕は「うん、さうだ、うん、さうだ」と返辭をしてゐる。勿論頭には何事をも考へてはをらぬのである。僕は別にやかましいから止めてくれ／＼ば好いとも思はない。それかと云つて、長く聞せて貰ひたいなどは思ふ筈がない。此話の雑音と三味線のがぢや／＼と、どちらが不快の程度が甚だしいかといふやうな事を考へたところで、零と零とを集めて算術をするやうなもので始まらないのである。そのうちに、此男の話の中で、こんな事



を言ふのが僕の意識に上つた。

「君は謡曲に對して奈何なる意見を有してをるかを、僕は君に問ひたいのである。謡曲の何物たるか、謡曲なるもの、本義本體に關する所の君の高見を叩きたいのである。」

「さあ、かうなつて來ると、僕も何とか云はなくてはならない。」

「僕にも別に纏まつた意見はないよ。」

「いや。それは我輩の聊か了解に苦む所である。君の如き文學の大家にして、謡曲なるものに對して、我邦特有の所謂謡曲なるものに對して、何等の意見をも懐抱してをられないといふことは、我輩の信ぜんと欲するも能はざる所である。」

「それは少しは考へた事もあるよ。併しこんな處では話しくいよ。」

「さうでありませう。必ず應<sup>まは</sup>に然るべきであると、僕は信ずる。果して然らばだ。何故に君は其金玉の論を、其高論卓説を天下公衆に向つて發表せぬのでありますか。」

「少しは書いた事もあるよ。」

「どこに書いてあります。其の書いてある所の書籍の題號が承知したいのである。僕非才淺學なりと雖、一讀の榮を有したいのである。」

「しがらみ草紙に書いたのだよ。」

「なに、しがらみ草紙。それはいかなる書籍であるか。僕寡聞にして未だ之を審にせざるのである。」

徳富君に似た少年は、床の間の前の某少將と何か話をしながら、僕の顔を見てにや／＼笑つてゐる。お酌の中に色の蒼い、ませた、目の窪んだ、笑ふと一センチメートル位の深さの笑靨の現れる子がゐた。なか／＼可哀らしいが、何だか少し顔附が髑髏に似てゐるやうだと、僕はさつきから思つて見てゐた。此お酌が年寄の士官がいぢめられるとでも感じたのであらう。僕の隣でしゃべつてゐる記者の前へ來て、徳利を記者の鼻の先へ出した。

「あなた。一つお上がんなさいよ。」

記者は僕の隣の誰かの僕にあつた杯を取つて、中の酒を齒形の附いた蒲鉾の上へあけて、酌をさせた。酌をさせながらお酌の體を上から下へ撫でるやうに、例の眇のやうな目で見た。僕は女好だなと思つた。

僕はふいと座敷を見渡した。すると座敷の真中で、一人の記者が踊つてゐる。細おもての色白い男で、酔つて目の縁が赤くなつてゐるのに、金縁の目金を掛けてゐる。着物は夜具のや



うな茶編で、着流しに兵児帯である。踊は何だか分らない。昔寄席に行つた頃に見たことのあるすてゝことかいふやうなものである。例の藝者ががぢや〜と地を弾いてゐる。此男は前から、大編の着物を着てゐると、人と話をする時に、遊人のやうにやざうといふものを拵へてゐるので、僕の注意を惹いてゐたのであつた。

隣の謡曲記者がかう云つた。

「君に僕の謡曲を一つ聞いて貰ひたいのである。僕は君の快諾せられんことを希望の至に堪へざるのである。」

「好いから聞せ給へ。」

謡曲記者は口を僕の左の耳に押つ附ける様にして小督をうなり始めた。

僕は別にやかましいとも思はなかつた。天秤でも澤山の法馬おまを載せてあると、更に其上へ少しばかり法馬おまを載せたからと云つて、天秤の舌には格別影響しないのである。それと同じで、それまでにもうやかましい絶頂に達してゐるから、その上にやかましくなりやうもないのである。

謡曲は餘り上手ではないと思つた。併し眞面目に遣つてゐる。此人は酒飲だか下戸だか知らないが、顔は赤くなつてはゐなかつた。

此時座敷の隅を曲つて右隣の方に、坐布團が二つ程あいてゐた、その先の分の坐布團の上へ、さつきの踊記者が来て胡坐をかいた。横にあつた火鉢を正面に引き寄せて、両手で火鉢の縁を押へて、肩を怒らせた。そして顔を反らして斜に僕の方を見た。傍へ來たのを見れば、褐色の八字髭が少しあるのを、上に向けてねぢつてゐる。今初めて見る顔である。

その男がかう云つた。

「へん。氣に食はない奴だ。大沼なんぞは馬鹿だけれども剛直な奴で、重りがあつた。」

かう云ひながら、火鉢を少し持ち上げて、疊を火鉢の尻で二三度とんとんと衝いた。大沼の重りの象徴にする積と見える。

「今度の奴は生利に小細工をしやがる。今に見ろ、大臣に言つて遣るから。(間)此間委員會の事を聞に往つたとき、好くも幹事に聞けなんと云つて返したな。こんど逢つたら往來へ撮み出して遣る。往來で逢つたら軍刀を抜かなけりやならないやうにして遣る。」

左隣の謡曲はまだ濟まない。左の耳には小督が聞える。右の耳には此脅迫の聲が聞えるのである。僕は思ひ掛けない話なので、暫くあつけに取られてゐた。人の寫象といふものは可笑しなもので、あつけに取られてゐる間に多少の餘裕がある。僕は軍刀を抜かせると云ふことを聞



いた時に、埃太利で一時評判の高かつた Leutnant Gustel といふ小説の事を思ひ出した。そして今度逢つたらを繰り返すのを聞いて、何の思索の暇もなくかう云つた。

「何故今遣らないのだ。」

「うむ。遣る。」

と叫んで立ち上がる。障子を開けて縁側に出る。すわつてゐる僕の右の肘を握つて引く。これが一秒をも費さない間の事であつた。

僕に思索する暇はない。只彼が敵對するといふ丈は分かつても、奈何に敵對するかといふことは分からずに、僕は立つた。彼の手は肘からすべつて、僕と右の手を握り合ふことになつた。彼は引く。僕は引かれまいとする。二人の足の尖は殆ど相觸れて、右の手を引き合つてゐるのだから、丁度三角定木を倒に立てたやうな形になつた。

彼は僕を庭へ振り落さうとする。僕は彼の手を放すまいとする。手を引き合つた儘、二人は縁から落ちた。

落ちる時手を放して、僕は左を下に倒れて、左の手の甲を花崗石で擦りむいた。立ち上がつて見ると、彼は僕の前に立つてゐる。

僕には此時始めて攻勢を取らうといふ考が出た。併し既に晩かつた。

座敷の客は過半庭に降りて来て、別々に彼と僕とを取り巻いた。彼を取り巻いた一群は、植込の間を庭の入口の方へなだれて行く。

四五人の群が僕を宥めて縁から上がらせた。左の手の甲が血みどれになつてゐるので、水で洗へと云ふ人がある。酒で洗へと云ふ人がある。近所の醫者の處へ石炭酸水を貰ひに遣れと云ふ人がある。手を包めと云つて紙を出す。手拭を出す。年長の某記者は親切にも、少し鼠色になつた縮緬の兵兒帯を裂いてくれようとする。髑髏のお酌は可哀らしい口紅の痕を印した絹のハンケチを出すのである。

「創といふものは此儘にして置くのが好いのだ。」

僕はかう云つて、左の手を背中の方へ廻して避けてゐると、皆は僕が怒つて手當をしないのだとでも思ふのか、頻りに勧めて已まない。併し僕はとう／＼断り果せた。

皆が勧めるから嫌な酒を五六杯飲んだ。

踊記者の顔は再び席には見えなかつた。

僕は暫くして席を立つて、防水雨覆の下へ血の出る手を隠して電車に乗つた。二月二日の夜にしては、風が無い爲めか寒くなかつた。



牛 鍋

鍋はぐつ／＼煮える。

牛肉の紅は男のすばしこい箸で反される。白くなつた方が上になる。

斜に薄く切られた、ざくと云ふ名の葱は、白い處が段々に黄いろくなつて、褐色の汁の中へ沈む。

箸のすばしこい男は、三十前後であらう。晴着らしい印半纏を着てゐる。傍に折靴が置いてある。

酒を飲んで肉を反す。肉を反しては酒を飲む。

酒を注いで遣る女がある。

男と同年位であらう。黒緇子の半衿の掛かつた、縞の綿人に、餘所行の前掛をしてゐる。

女の目は断えず男の顔に注がれてゐる。永遠に渴してゐるやうな目である。

目の渴は口の渴を忘れさせる。女は酒を飲まないのである。

箸のすばしこい男は、二三度反した肉の一切れを口に入れた。

丈夫な白い歯で旨さうに噛んだ。

永遠に渴してゐる目は動く脛に注がれてゐる。

併し此脛に注がれてゐるのは、この二つの目ばかりではない。目が今二つある。

今二つの目の主は七つか八つ位の娘である。無理に上げたやうなお煙草盆に、小さい花簪を挿してゐる。

白い手拭を疊んで膝の上に置いて、割箸を割つて、手に持つて待つてゐるのである。

男が肉を三切四切食つた頃に、娘が箸を持った手を伸べて、一切れの肉を挟まうとした。男に遠慮がないのではない。そんならと云つて男を憚るとも見えない。

「待ちねえ。そりやあまだ煮えてゐねえ。」

娘はおとなしく箸を持った手を引つ込めて、待つてゐる。

永遠に渴してゐる目には、娘の箸の空しく進んで空しく退いたのを見る程の餘裕がない。

暫くすると、男の箸は一切れの肉を自分の口に運んだ。それはさつき娘の箸の挟まうとした肉であつた。



娘の目は又男の顔に注がれた。その目の中には怨も怒もない。只驚がある。

永遠に渴してゐる目には、四本の箸の悲しい競争を見る程の餘裕がなかつた。

女は最初自分の箸を割つて、盃洗の中の猪口を挟んで男に遣つた。箸はその儘膳の縁に寄せ掛けてある。永遠に渴してゐる目には、又此箸を顧みる程の餘裕がない。

娘は驚の目をいつ迄男の顔に注いでゐても、食べろとは云つて貰はれない。もう好い頃だと思つて箸を出すと、その度毎に「そりやあ煮えてゐねえ」を繰り返される。

驚の目には怨も怒もない。併し卵から出たばかりの雛に穀物を啄ませ、胎を離れたばかりの赤ん坊を何にでも吸ひ附かせる生活の本能は、驚の目の主にも動く。娘は箸を鍋から引かなくなつた。

男のすばしこい箸が肉の一切れを口に運ぶ際に、娘の箸は突然手近い肉の一切れを挟んで口に入れた。もうどの肉も好く煮えてゐるのである。

少し煮え過ぎてゐる位である。

男は鋭く切れた二皮目で、死んだ友達の一人娘の顔をちよいと見た。叱りはしないのである。只これからは男のすばしこい箸が一層すばしこくなる。代りの生を鍋に運ぶ。運んでは反す。

反しては食ふ。

併し娘も黙つて箸を動かす。驚の目は、或る目的に向つて動く活動の目になつて、それが暫らくも鍋を離れない。

大きな肉の切れは得られないでも、小さい切れは得られる。好く煮えたのは得られないでも、生煮えなのは得られる。肉は得られないでも、葱は得られる。

淺草公園に何とかいふ、動物をいろ／＼見せる處がある。名高い狒々のゐた近邊に、母と子との猿を一しよに入れてある檻があつて、その前には例の輪切にした薩摩芋が置いてある。見物がその芋を竿の尖に突き刺して檻の格子の前に出すと、猿の母と子との間に悲しい争奪が始まる。芋が来れば、母の乳房を銜んでゐた子猿が、乳房を放して、珍らしい芋の方を取らうとする。母猿もその芋を取らうとする。子猿が母の腋を潜り、股を潜り、背に乗り、頭に乗つて取らうとしても、芋は大抵母猿の手に落ちる。それでも四つに一つ、五つに一つは子猿の口にも入る。

母猿は争ひはする。併し芋がたまさか子猿の口に這入つても子猿を窘めはしない。本能は存外醜悪でない。



箸のすばしこい本能の人は娘の親ではない。親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱りはしない。

人は猿よりも進化してゐる。

四本の箸は、すばしこくなつてゐる男の手と、すばしこくならうとしてゐる娘の手とに使役せられてゐるのに、今二本の箸はとう／＼動かずにしまつた。

永遠に渴してゐる目は、依然として男の顔に注がれてゐる。世に苦味走つたといふ質の男の顔に注がれてゐる。

一の本能は他の本能を犠牲にする。

こんな事は獣にもあらう。併し獣よりは人に多いやうである。

人は猿よりも進化してゐる。

### 里芋の芽と不動の目

東京化学製造所は盛に新聞で攻撃せられながら、兎に角一廉の大工場になつた。

攻撃は職工の賃銀問題である。賃銀は上げて遣れば好い。併しどこまでも上げて遣るといふわけには行かない。そんならその度合はどうして極まるか。職工の生活の需要であらうか。生活の需要なんぞといふものも、高まらうとしてゐる傾はいつまでも止まることはあるまい。そんなら工場の利益の幾分を職工に分けて遣れば好いか。その幾分といふものも、極まつた度合にはならない。

工場を立てゝ行くには金がある。併し金ばかりでは機關が運轉して行くものではない。職工の多数の意志に對抗する工場主の一人の意志がなくてはならない。工場主は自分の意志で機關を運轉させて行くのである。

社會問題にいくら高尚な理論があつても、いくら緻密な研究があつても己は己の意志で遣る。職工にどれ丈のものを與へるかは、己の意志でその度合が極まるのである。東京化学製造所長



になつて、二十五年の間に、初め基礎の危かつた工場を、兎に角今の地位まで高めた理學博士増田翼はかく信じてゐるのである。

製造所の創立第二十五年記念の宴會が紅葉館で開かれた。何某の講談は鹽原多助一代記の一節で、その跡に時代な好みの紅葉狩と世話に賑やかな日本一と、こゝの女中達の踊が二組あつた。それから響應があつた。

三間打ち抜いて、ぎつしり客を詰め込んだ宴會も、存外靜かに濟んで、農商務大臣、大學總長、理科大學長なんぞが席を起たれた跡は、方々に群をなして女中達とふざけてゐた人々も、一人歸り二人歸つて、いつの間にか廣間がひっそりして來た。

もう十一時であらう。

今日の主人増田博士の周圍には大學時代からの親友が二三人、製造所の職員になつてゐる少壯な理學士なんぞが居残つて、爛の熱いのをと命じて、手あきの女中達大勢に取り巻かれて、暫く一夕の名残を惜んでゐる。

花房といふ、今年卒業して製造所に這入つた理學士に、兒鬚に結つた娘が酌をすると、花房が顧みながら云つた。

「何だ。お前の袖からは馬鹿に好い匂がするぢやあないか。何を持つてゐるのだ。」  
「これなの。」

娘が絹のハンケチを取り出した。

「それだそれだ。匂で思ひ出したが、ここの内に丁度お前のやうな蕪といふ子がゐるが、あれはどうした。」

「蕪さんはお内へ歸りましたの。」

「内は何だい。」

「お醫者さんですわ。」

「おほ方誰かが一旦内へ歸して置いて、それからお上さんにするといふやうなわけだらう。」  
「知りませんわ。」

こんな話をしてゐるうちに、聯想は聯想を生んで、臺灣の樟腦の話が始まる。樺太のテレベソ油の話が始まるのである。

増田博士は胡坐を掻いて、大きい剛い目の目尻に皺を寄せて、ちびりちびり飲んでゐる。抜け上がった額の下に光つてゐる白目勝の目は頗る剛い。それに皺を寄せて笑つてゐる處がひど



く優しい。此矛盾が博士の顔に一種の滑稽を生ずる。それで誰でも博士の機嫌の好い時の顔に對するときは、微笑を禁じ得ないのである。

誰やらが、樺太のテレベン油は非常な利益になりさうで、始めて製造を試みた何某の着眼は實にえらいといふ評判だと云ふと、黙つて酒を飲んでゐた博士が短い笑聲を洩した。

「あれか。あれは樺太へ立つ前に己の處へ来たから、己が氣を付けて遣つたのだ。」

一同耳を敬てた。此席にゐる丈のものは、皆博士が人の功を奪ふやうな人でないことを知つてゐる。それだから、皆博士の此詞に信を置くのである。博士は再び無邪氣らしい、短い笑聲を洩して語り續けた。

「あればかりではないよ。己の處へは己の思付を貰ひに来る奴が澤山あるのだ。むつかしく云へば落想とでも云ふのかなあ。獨逸語なら Einfallen とでも云ふのだらう。併し己は嘘は言はなから、誰も落ち込みはしない。己は遣つて来る人の性質や伎倆や境遇を見て、その人に出來さうな爲事を授けるのだ。それで成功したものが、これまでに随分あるよ。妻がいつも傍で聞いてゐてさういふのだ。あなたそんなにお金になるやうな事を澤山知つて入らつしやるなら、御自分で少し爲て御覽なすつてはどうですと云ふのだ。女なんといふものは馬鹿なものだ。な

んでも餘所で爲る事を好い事だと思つてゐる。己には己の爲事がある。己なんぞは會社の爲事をして給料を貰つてゐりやあ好いのだ。爲事は一つありやあ好いのだ。思付なんぞはいくらでもあるから、片つ端から人にくれて遣る。それを一つ掴まへて爲事にする奴が成功するのだ。中には己の思付で己より澤山金をこしらへるものもある。金か何だ。金くらの詰まらないものが、世の中にありやあしねえ。」

博士はそろそろ巻舌になつて來た。博士は純粹の江戸子で、何か話をして興に乗じて來ると、巻舌になつて來る。これが平生寡言沈黙の人たる博士が、天賦の雄辯を發揮する時である。そして博士に親しい人々、今夜此席に居残つてゐるやうな人々は、いつもかういふ時の來るのを樂み待つてゐるのである。

博士は虚になつた杯を、黙つて兒鬚の子の前に出して酒を注がせて、一口飲んで語り續けた。「金か何だ。會社は事業をする爲めに金がある。己はいらねえ。己達夫婦が飯を食つて、餓鬼共の學校へ行く錢が出せれば好い。金を溜めるやうなしみつたれは江戸子ぢやあねえ。」

かういふ話になると、獨り博士の友達が喜んで聞くばかりではない。女中達も面白がつて聞く。兒鬚の子供も、何か分からないなりに、その爽快な音吐に耳を傾けるのである。



胡麻鹽頭を五分刈にして、金縁の目金を掛けてゐる理科の教授石栗博士が重くろしい語調で  
 喙を容れた。

「一體君は本當の江戸子かい。」

「知れた事さ。江戸子のちやきちやきだ。親父は幕府の造船所に勤めてゐたものだ。それあの  
 何とかいふ爺いさんがゐたつけなあ。勝安芳よ。勝なんぞも苦勞をしたが、内の親父も苦勞を  
 したもんだ。同じ苦勞をしても、勝は靱い命を持つてゐやあがるから生きてゐた。親父はこつ  
 くり行き着いたのだ。病氣も何もないのに死んだのだ。兄きは大鳥圭介に附いて行つちまふ。  
 お袋と己とは廣徳寺前の屋敷にぼんやりしてゐると、上野の戦争が始まつた。門番で米嚮をし  
 てゐた爺いが己を負ぶつて、お袋が系圖だとか何だとかいふものを風爐敷に包んだのを持つて、  
 逃げ出した。落人といふのだな。秩父在に昔から己の内に縁故のある大百姓があるから、そこ  
 へ逃げて行かうといふのだ。爺いの背中で、上野の焼けるのを見返り見返りして、田圃道を逃  
 げたのだ。秩父在では己達を歓迎したものだ。己の事を江戸の坊様と云つてゐた。」

「なんでも江戸の坊様に御馳走をしなくちやあならないといふので、蕎麥に鳩を入れて食はし  
 てくれたつけ。鴨南蠻といふのはあるが、鳩南蠻はあれつきり食つた事がねえ。」

「さうしてゐると打毀ぶちこぼしといふ奴が來やがつた。浪人ものといふやうな奴だ。大勢で押し込んで  
 來やがるのだ。親父がびよびよこお辭儀をして、酒樽の鏡を抜いて馳走をしたもんだから、  
 拍子抜がして素直に歸つて行きやあがつた。ところが二三日すると又遣つて來やがつた。件  
 の方は利かねえ氣の奴だつたから、野猪狩ししがらに持つて行く鐵砲を打ち掛けた。さうすると奴共慌て  
 て逃げてしまやあがつた。」

「そのうちに世間が段々靜かになつて來た。己は毎日毎日土藏の脇で日なたぼっこをしてゐた。  
 頭の上の處には、大根が注連繩のやうに干してあるのだな。百姓の内でも段々厭きて來やがつ  
 て、もう江戸の坊様を大事にしなくなつた。鳩南蠻なんぞは食はしやあしねえ。」

「或日の事、かますといふものに入れた里芋を出しやがつて餓鬼共にむしらせてゐやあがるの  
 だ。餓鬼は大勢ゐたのだ。むしつて芽の所を出して見て、芽の闕けた奴は食ふ方へ入れる。芽  
 の満足でゐる奴は植ゑる方へ入れるのだ。己が立つて見てゐると、江戸の坊様も手傳つてお遣  
 なさいと抜かしやあがる。大ぶ江戸の坊様を安く踏むやうになりやあがつたんだな。かうなつ  
 ちやあ爲方しかたがねえ。己もそこへ胡坐を搔いて里芋の選分もろびを遣つ附けた。ところが己はちびでも  
 江戸子だ。こんな事は朝飯前だ。外の餓鬼が策に一ぱい遣るうちに、己は二はい遣るのだ。百







「十二時です。」

「さうか。諸君は車が待たせてあるから好いが、己はぐづぐづすると電車に乗りはぐれる。さあ、行かう行かう。」

### ル・パルナス・アンビュラン

荒物屋の横町に人立がしてゐる。

白い着物を着せられた、よぼくした爺いさんが、白張の提灯を持つたり、竹の筒に挿した花を持つたりして、本通りの角まで、不規則に並んで、がや／＼云つてゐる。シルクハットを被つた男が、手に書付を持つて立つてゐて、痾積を起したやうな聲をして、指圖をしてゐる。葬の行列を作つてゐる最中である。

花に下げたある木札を見れば、何々新聞社とか、書肆何館とか何堂とかいふやうなのが多い。書肆なんぞとわざ／＼書いてあるのは、造次顛沛にも廣告といふことを忘れないのである。

小さい冠木門の傍の、大分古びた板塀に寄せ掛けてある銘旗の文字を見れば、名高い小説家の名である。此人は當世第一流の作家と云はれてゐたのであるから、獨逸や佛蘭西でもあらうものなら、キルヘルム陛下とか、フアリエール大統領とかの花輪でも來てゐる筈であるが、日本の第一流は本屋位が花をくれる外には、誰も顧みるものはないのである。



戴冠者や大統領は扱置き、國務大臣だつて花なんぞはくれない。第一流でもなんでも、小説家である以上は、政府は厄介ものだと思つてゐるのだから、死んでくれれば喜ぶのである。中にも此人なんぞと來ては、發賣禁止を五六遍食はせられてゐたのである。注意人物になつてゐたのである。いかに警察が行き届いても、泥坊の跡は絶えないと同じ事だ、小説家は跡から跡から出て來るのだが、それにしても第一流と云はれる先生は三人か四人であるから、それが一人死んでくれれば、神聖なる Casaire の任務に當るお役人が大いに助かるのである。

そんなら學士院だとか大學だとかいふものはどうかと云ふと、アカデミーに小説家が這入るだの、教授が小説を書くだのと云ふのは、遠い西洋の事で、小説を書くどころではない、小説を読むやうな、じだらくなものは學士院にもゐなければ、大學にもゐないのである。死んだ小説家に花なんぞをくれる筈がない。

本屋丈は花位くれる。併しこれも教科書を書いて貰ふやうに、小説の原稿を難有がつて貰ふのではない。殊に第一流の小説と來ては、讀者は男女の學生の外には餘り無いのだから、本屋もさ程恩恵を蒙つてはゐない。花をくれるのも、義理にくれるのである。

門の内の騒がしい人聲が一層騒がしくなつた。棺が支關から昇き出されるのである。

書付を持つたシルクハットの男は、さつきから人力車に乗つて待つてゐた坊さんと呼んで、花を持つた人足の次に、その車を留めて置かせる。坊さんはまだ二十代位で、何學林とかを出て間がないと見える。頭を剃る代りに器械刈にして、近眼目金を掛けてゐる。その頭が衣を脱いで俗にまぎれる時の用意らしく思はれる。

「こん度は君だ」とシルクハットが聲を掛けると、今一臺の車に乗つて待つてゐた、髪を長くした、寢惚けたやうな男が、「はい」と返事をして、坊さんの車の跡に續いた。兩手で不調法らしく、白木に戒名を書いた位牌を擎げてゐる。亡くなつた先生には長男があるから、それが位牌を持つ筈であるが、先生が亡くなる前まで自由戀愛を遣つてゐたので、細君と三人の子供とは、別居をしてゐて、葬にも立たない。そこで門人の此男が位牌を持つことになつたのである。

その跡へ四句の偈の旗を持つた人足が續く。自由戀愛はしてゐても、第一流の先生は餘り經濟が饒かではなかつたのであるし、それに平生やれ生の意義だの、生の受用だのとは云つてゐても、立派に生きるといふ程生きて見たのではなかつたのであるから、生滅滅已、寂滅爲樂には相違ない。

「こん度は棺だ」とシルクハットが叫んだ。流石第一流で、門人もある人であるから、寢棺丈



はきばつたのである。中にゐる先生は、死といふことは始終書いてゐたが、實はそんなに深く死といふものに就いて思索を費したのでもない。殊に自分の死といふことは少しも考へたことがなかつた。そこで遺言もない。又奇抜な事、奇抜な事と心掛けて書いてはゐたが、茶毗をせられる時の用意に、花火を懐中してゐたといふ、昔の作者の工夫もしては置かなかつた。只平凡な死骸になつて、棺の中に仰向になつてゐるのである。

シルクハットが門の内へ向いて、「棺側の諸君はどうしたのです」と叫んだ。手んでに銜へてゐた敷島かなんかを抛つて、四人の男が出て來た。シルクハットが一人に山高帽子が三人であるが、黒の洋服といふ所丈は揃つてゐる。尤も服の所有權に關しては、多少の疑を挟むべき餘地がないでもない。併しそんな事を言つて *Discs* を傷けてはならない。棺の中に仰向になつてゐる先生を除けて、日本の文壇で第一流と云はれる人は、此四人ばかりである。一步を進めて言へば、此棺と棺側とが即ち日本の文壇なのである。これが歩いてゐる文壇である。 *Parasse ambulant* である。

四人の使徒は棺の左右に二人づゝ立つて、威儀堂々として控へてゐる。右の前にゐるのは、シルクハットで、色の蒼白い、智略に富んでゐるさうな男である。その背後にゐるのは、色の黒

い、顔の四角な大男で、*devolement* に頂垂れた様子が、いかにも文壇の *isme* に對する信仰の強い人らしい。左の一人はまだ二十代で、鷹のやうな目をした、鼻つ端の強さうな男、今一人は大人しさうな、一度位見では記憶して置かれさうにない容貌の男である。

書付を持つたシルクハットが、今迄にない優しい聲で、「さあ、花子さん、あなたの番ですよ」と云ふと、ハンケチで顔を押へながら、廂髪の女が門の内から出て來て、棺の背後に佇んだ。棺の中で仰向になつてゐる先生に、若し意識があつたら、これで心残りがなく門出が出來ると、ほつと息を衝いたであらう。但し折々ハンケチを顔から離れたところを見れば、花さんは餘り別品ではない。

次に呼び出されたのは、數人の批評家で、近眼目金を掛けた瘦男が先頭に立つてゐる。これが文壇の主義の名附親である。謂はゞ *fondateur d'isme* である。文壇が内閣なら、これが書記官長である。跡に附いて列んだのは皆訓練を受けた少壯者である。主義の違つたものなどは交つてゐない。

書付を持つたシルクハットが、細長い體を反身にして、顔を反らして、「*Messieurs étrangers*」と呼んだ。



此時冠木門の向側にある、八百屋の店の溝板の上に、さつきから立つてゐて、珍らしさうに行列の出来るのを見てゐた、黒服の西洋人が四人、帽を脱いで遣つて来た。同じ黒服でも、此連中の着てゐるのは、羅紗の光澤が違ふ。帽子も同じ事である。手袋も大き過ぎて指の尖が餘つたり、細過ぎて無理に嵌めたやうになつたりしてはゐない。

西洋人は一人々々名刺をシルクハットに渡した。どれもく〜葬に來ては葬に來たらしくしてゐて、にく〜笑つたり、餘計な事を饒舌つたりはしないのである。シルクハットの男は少し慌て、手に持つてゐた書付をポケットにしまつて、シルクハットを脱いで、名刺を受け取つて、相手の顔と引き合せるやうにして、讀んで見た。

そして U. C. Delanature というフランス人らしい名の男に、「*Arrêtez-vous auprès de moi, Monsieur, il vous plait*」と云ふと、濃い褐色の髪を四角刈にして、妙に長く切れた細い目の、吊るし上がつてゐる此男は、黙つて帽を被つて行列掛の左後のあたりに、介添人らしい様子をして立ち留まつた。残つた名刺には Dr. Symbolicus, Dr. Mysticus, Dr. Neoromanticus と書いてある。行列掛は、此三人には餘程傲慢らしい態度で、「*Die Herren Doktoren bitte ich, sich dem Zuge anzuschliessen!*」と遣つ附けた。三人は丁寧な禮をして、行列に加はつた。兎に角行

行列掛の先生はいろんな國の語を饒舌るのである。尤も間違つてゐるかも知れない。又長い事が言へるかどうだか、其邊は保證の限でない。

行列掛はシルクハットを被つて、門の内へ向いて、「さあ〜若し諸君にさつさと出て貰はう」とどなつた。色の蒼い瘦せた二十前後の男がぞろ〜出て来て、列に這入つた。あらゆる帽子の種類が並ぶ。羽織は着てゐるものもあるが、袴丈は皆穿いてゐる。その間々にいろんな學校の制服が交る。一年志願兵の軍服なんぞは交つてゐない。それは其筈である。身體検査を受ければ、丁種になりさうなのが揃つてゐるのである。

行列掛のシルクハットは、ポケットから書付を出して一寸見て、すぐに皺くちやにしてポケットに押し込みながら、「やれ〜、跡は並の會葬者だ」と、人に聞えるやうに云ふかと思ふと、横町に人力車を留めて待つてゐる大勢に、くるりと背中を向けて、急ぎ足に棺の跡を追つて行く。例の西洋人は、それを變だとも思はない様子で、影の形に添ふやうに、同じ歩調で歩いて行く。二人は棺の直後の廂髪の傍まで来て、シルクハットが花子さんの左に並ぶと、ドラナチュウル君は心得顔に花子さんの右に並ぶのである。

跡では車夫等のがや〜罵り合ふ聲の中に、數十臺の人力車の列が、自然淘汰の方則の下に



出来る。車上の人は、年寄もあれば若いものもある。第二流以下の小説家 *isime* の違つた批評家、戯曲家、長詩家、短詩家なんぞである。その列は自然淘汰で出来ると云つたが、それは車の上の先生方の自然淘汰ではない。車夫と車夫との間に行はれる自然淘汰を謂ふのである。何處かの停留所で電車から降りて、偶然乗つた車の車夫の技倆次第なのである。

人力車に乗つてゐる連中は、皆お人好しばかりで、シルクハットに何と云はれようが、自分が後にならうが、そんな事には頓着しない。不斷から、書かせることは書かせて遣る、息の根丈は留めずに置いて遣る、第二流だと心得て書いてゐると申し渡されて、書いてゐる位なのである、感覚が鈍つてゐるので、こんな時には抜ひ好いのである。

髪も髭も白くなつて、車の背に倚つ掛かつて、半分眠つてゐるやうなのは論はない。洋行歸のハイカラでカイゼル髭を生やしたのもあるが、ひどく *martial* な風采の割には、従順極まつてゐる。まさか警察國の空氣に喘いで来たからでもあるまいが、兎に角従順極まつてゐる。中には女もちらほら見える。大分猛烈な思ひ切つた事を書いてゐるものもあると云ふが、その癖見た所は矢つ張普通のお嬢さん奥さんである。不思議にはいかんで、車の上で小さくなつてゐるのさへある。

人力車の行列はどうやらからから出来たが、尻の方は大分ごたつく。それは亡くなつた先生の家の名を書いた、小さい旗を立てた空車が、先へ出よう出ようとするからである。花子さんの車、棺側の先生方の車、シルクハットの行列掛の車なんぞは、動もすれば人を載せた車の間へ引き込んで行列の邪魔をするのである。幸に近所から駆け附けた巡査が制して、喧嘩をさせないやうにして行くのである。

それでも人数の割に混雑しないのは、馬車や自動車がないからである。書肆なんか館の主人は、自動車も持つてゐれば、馬車も持つてゐるが、葬に自動車で行つて好いか悪いかといふので、番頭に使つてゐる、洋行歸の文學士に聞いて見たが、要領を得ない。その位な事が分らないかと云ふと、「成程あなたに洋行はさせて貰つたが、葬式を見て来いとは仰やらなかつたやうです」と云ふ。主人は何か言ひたいのを、口の内で噛み潰して、馬車の方にしようと思つて、仲働に命を傳へさせると、生憎蹄鐵を打ちに行つて、馬丁も馬もゐないといふ。そこでとう／＼店のものゝ乗る人力車にして来たので、第二流の先生方の間に挟まれて、なる丈背伸をして、息張つてゐるのである。第一流の先生の葬を、馬車が一臺も送らないのはかうした因縁からである。



併し爰に異彩を放つた會葬者が一人ある。自動車にも馬車にも乗つてゐないが、此男は馬に乗つてゐるのである。カーキ色の軍服に大きい勳章を付けてゐるのは好いが、人力車の跡に附かうとして、人を載せた車と空車の間に挟まれて、馬はいれる。車夫は小言を言ふ。巡查も此男の處分には困つたが、お役人に文句を言ふわけにも行かないと見えて、黙つて見てゐた。とうとう騎馬の先生は空車の跡に廻つて附いて行く。「やあい、えらい人の癖に、あんな尻の方に附いて行かあ」と、子供連が囁してゐる。

これで行列は出來た。

行列は凡二三町續いて、表通を練つて行く。電車は留まる。往來は支へる。馬車のない葬には珍らしい盛況である。

時は維れ明治四十三年五月二十日である。や、忘れた。まだ場所を言はなかつた。場所は無論日本東京の山の手である。丁度此の日に倫敦では、Edward, King of the United Kingdom of Great Britain and Irland, and Em. eror of India を葬り奉るのである。東京では第一流の小説家、なんとか主義の作家、布衣の戴冠者たる此先生を葬るのである。

恰も好し、天晴れ氣爽かである。春過ぎて夏はまだ來ない。寒くもなければ、暑くもない。

若し雨でも降らうものなら、棺側の御歴々を始め、準第一流の批評家、同新進作家は、ぬかるみに足を踏み込まねばならなかつたのであらう。若し風でも吹かうものなら、どんなにか埃を浴びたことであらう。

往來の所々では彗星が見えるといふので、どんな時でも綽々たる餘裕を示す東京の市民が、のん氣に天を仰いでゐる。それがみんな天の方をよして葬の行列を見る。中に交つてゐる學生が銘旗を讀むと、その連の二三人は棺側の四人をじろく見て、あれはなんとかだ、なんとかもゐると、指さしをして囁き合ふのである。

「矢つ張彗星的人物だね」と、一人の學生が云ふと、連の學生が笑ひ掛けて、慌てゝ口を噤んだ。

行列が紀尾井町に來て、先頭が辨慶橋に掛からうとした時であつた。それまでにドラナチュウル君は頬に何か花子さんに囁いてゐたが、ハンケチを顔へ當てたり離したりして歩いてゐた花子さんがいつの間にか妙にはしやいで來て、小聲で何やら留めどなく饒舌り出した。もう手にはハンケチを持つてゐないのである。行列掛をしてゐたシルクハットの先生は、大相氣になる様子で、耳を欬てゝ聞かうとするが、ちき側で言つてゐるのがどうも好く聞えない。兎に角日本語には相違ない。花子さんが折々、「いやあね」とか、「まさか」とか云ふのが聞える。シル



クハットは、はてな、大使館の通譯でもしてゐる人か知らんと思ひながら、一しよう懸命に聞かうとしてゐるので、行列がどこを歩いてゐるか、一切知らずにゐた。

先頭が辨慶橋に掛からうとした時である。ドラナチュウル君が花子さんの、赤くなつてゐる耳の傍へびんと尖つた八字髻を持つて行つて、「一寸御免なさいよ」と云ふのが、シルクハットの耳にはつきり聞えた。始てドラナチュウル君の詞がはつきり聞えたのである。

さう云ふかと思ふと、ドラナチュウル君は棺の右をつと通り抜けて、位牌を持つた書生さんにも、器械刈の坊さんにも構はずに、花の行列を駆け抜けて、白張提灯の行く先頭の處へ行く。それが殆ど空を飛ぶやうなのである。

花子さんはうつとりなつたやうな工合で、少し大き過ぎる口の周圍に、夢を見てゐるやうな微笑を湛へて、noctambule かなんぞのやうに、ふら／＼と歩いてゐて、今迄熱心に會話をしてゐた相手の突然なくなつたのに、丸で氣が附かないのである。

シルクハットは怪しい西洋人の駆け出すのを、口を大きく開いて、あつけに取られて見てゐたが、それでも花子さんの魅せられたやうな、變な様子に丈は氣が附いた。併しそんな事を思つたのも一刹那である。なんと思つたか、花子さんの、少し胡坐をかいた鼻の尖を擦るやうにして、

花子さんの歩きさうになるのを構はず、行列の右に廻つて、西洋人の跡を追つて駆け出した。

併しもう西洋人の影も形も見えない。坊さんを載せた車も、書生さんを載せた車も、のろりのろりと進んで行く。晴れ渡つた空の下を、長い長い花の行列が行く。花の尖がゆらく動く。午前十時半頃になつて、大分暖かいので、人足は汗を掻いて、眠さうな顔をして歩いてゐる。

此光景は思慮する邊のないシルクハットの目に、只一刹那映じたのである。シルクハットは花の行列を駆け抜けようと思つてゐるのであるが、體は前屈みになつて看板のシルクハットが脱げさうになつて、氣ばかり揉めて、足は一つ所を踏んでゐるやうな心持がしてゐるのである。

突然恐ろしい物音がした。まだ號砲が鳴るには早い。今日は三一會堂で英國の大使が法會をするので、弔砲が鳴る筈ではあるが、それにもまだ少し早い。物音も大砲とは違つてゐる。なんだか「halt!」と云つたやうである。人間の聲であつたやうだ。いや、人間以上のものゝ聲であつたやうだ。

不思議にも行列がびたりと留まつた。花を持つたものは花を持つた儘、片手で汗を拭き掛けてゐたものは汗を拭き掛けた儘、棺を擔いでゐるものは棺を擔いだまゝ、棺側を俯向いて歩いてゐる人は俯向いたまゝ、振り返つて歩いてゐる人は振り返つたまゝ、花子さんは口の周圍に



微笑を湛へた儘、歩調の揃つた西洋人は揃つたまゝ、歩調のめぢや／＼な日本人はめぢや／＼なまゝ、車夫は車の梶棒を握つたまゝ、カーキイ服の人の乗つてゐる馬は左の前足を地に着けさうにして、對角になつてゐる右の後足を擧げさうにしたまゝ、何もかも凝り固まつたやうになつて、びたりと留まつたのである。

最も可笑しいのはシルクハットである。體を前屈みにして、帽が脱げさうになつて、飛行機なしに飛んで見ようとでもしてゐるやうな風をして、そのまま留まつてゐる。若しこれが彫刻なら、餘程大膽な Position である。地震國には不向きである。

その癖此シルクハット先生は、精神が至極髓かである。「青天白日にけしからん」、「不自然極まる」、「Isme」背いてゐる」、「第二流だ」、「自然の誤譯だ」、「消極的だ」、「形式ばかりだ」、「半無機物主義だ」といふやうな判断が、不規則不順序にシルクハットの下で湧き立つてゐる。

どうにかして動いて見ようと、氣を揉んでも、足は磁石力で吸ひ附けられてゐるやうで、體は銅像にでもなつたやうで、ちつとも動かない。こんな天氣の好い日にあり勝の事で、靜まり返つた空氣の海の面に、小さい波動が生じたやうに、どこからか風がさつと吹いて來るかと思ふと、旋風の雛形を見るやうに、丁度シルクハットの止まつてゐる足元から、二尺ばかりの土

埃の柱が立つて、それが傾いて、シルクハットの着てゐるオバアコオトの裾を潜つて行く。それに上衣の裾は少しも動かないのである。

シルクハットはあせりにあせつた。實は其時間は三分か四分であつたかも知れないが、シルクハットの爲めには、小一時間も立つやうに感じた。辨慶橋からこつちは、いつも靜かな所で、丁度此間人通りはなかつたが、橋向うからは現實の世界の鈍いどよめきが聞える。赤阪見附下で交叉する電車が、びんと云つて電線を鳴らして行くのも聞えるのである。

どうした機會でか、シルクハットはふいと自分の體の動くのを感じた。花を持つてゐる人足は動かないのに、自分の體丈が動くのである。締めたと思つて、歩き出しさうになると、平均を失つてあふなく倒れる所であつた。はつと思つて踏み止まつて、こん度は下腹に力を入れて、そろ／＼歩き出す。有難い。慥かに歩ける。

歩けるには歩けるが、田の中をでも歩くやうに、足をたがひ違ひに引き抜くやうにしなくては歩けない。縛は半分解けたのである。シルクハットは汗をたら／＼流して、半縛主義半囚主義の歩き方を遣つてゐる。丁度鷲のやうな歩き附である。

不馴な士官が、兩脚規で地圖の距離を測るやうに、シルクハットはやつと長い／＼花の行列



を通り越して、先頭に来て見ると、怪しい西洋人が橋の袂に、橋を背にして立つてゐる。切れの長い目の奥から、今まで氣の附かなかつた異様な光を射出して、さも満足げに凝り固まつた行列を見渡してゐるのである。

漸く傍まで兩脚規を運んで行つて、こはく西洋人の顔を横から覗いてみると、「氣樂な葬だなあ、まだ休んでゐるやがる」と云ふ聲が耳元にする。振り返つて見ると、辨慶橋の欄干に淺葱色の風爐敷を頸に巻いて、願の下で結んだ、いが栗頭の小僧が腰を掛けて、足をぶら／＼させながら、さう云つたのであつた。

シルクハットは此小僧を見て、辨慶が七つ道具でも背負つて、尻押に出て来てくれたやうな心持がした。それと同時に吹き消したやうに、體のぎごちないのが直つた。

「Que faites-vous, Monsieur?」

餘程手強く言ふ積であつたが、遺憾ながら聲が顫へてゐた。西洋人はその異様な目の光を、ちよいと浴びせ掛けて置いて、蛇がおこつた時に出すやうな、しゅつしゅつといふ聲を出す。それが耳を刺すやうで、一つ一つの詞が鋭く響くのである。

「Tais-toi !-Ne-bouge—pas!」

最後の詞が響き已んだかと思ふと、シルクハットの體は又凝り固まつたやうに、動かなくなつてしまつた。こん度は姿勢がさつきの時より好いので、餘程安全である。

併し安全だからと云つても、氣樂になつてはゐられない。こんな筈はない、有り得べからざる事だと思つて、又あせり出す。そしてあせつても、あせつても、駄目なのである。

此時西洋人は並木の入口に立てた銅像なんかのやうに、二列に續いた花の前に立つて、行き留まりの阪の降口に近い處に留まつてゐる棺の邊まで、只一目に見渡して、例の鋭い聲で、何やら唱へ出した。

獨逸語や、英語や、佛語ではない。伊太利、西班牙、葡萄牙、ずつと飛んでステアウダのポオランドだのは、シルクハットの先生に讀めも話せもないが、横濱の商館にゐたとき聞き覚えて、おほ方さうだらう位は分かる筈だ。そんなら古い拉句や希臘かといふに、さうでもないらしい。なんだか丸で見當の附かない語である。Hebraïque: ともではあるまいかと、ふいと思つた。

實はシルクハットに此語が分からなくて好かつたのである。なぜといふに、若しそれが分かつたら、ここへ書くことになるかも知れない。さうすると固有名詞や動植物の名を、羅馬字で書いた位の事ではない。秀英舎にも樂地活版所にもないやうなタイプを扱んだ文章を出すとい



ふ、途方もない事の爲めに俑を作るといふわけになつたかも知れない。想像するだに身の毛も  
 彌立つ次第ではないか。

西洋人はなんだか分からない事を唱へ已んだと思ふと、行列へくると背を向けて、ぐんぐ  
 ん橋の方へ歩き出した。シルクハットも自分の體をごつりとこづかれたやうな心持がして、器  
 械的に、否諾なしに、西洋人の右後に引き添つて、橋の方へ歩き出した。「やあ、歩き出しやあ  
 がつた」と、さつきの小僧の云ふのを見ようと思つたが、首が少しも曲がらない。分列式をする  
 兵卒のやうに、眞直に前へ向いて歩くのである。背後には行列の附いて来る足音がする。行列  
 が附いて来るなと思ふが、振り返つて見ることは出来ないのである。

お察しの通りである。行列は附いて来る。花や旗を持った人足も、棺も棺側も車も馬も眞直  
 に前へ向いて附いて来る。誰一人餘所見をすることは出来ないのである。

そしてその歩く速度が頗る早い。運轉手が慌てゝ止めた電車の間を抜けて、赤坂見附下の廣  
 場を斜に横切つて、赤坂の通を行列が行く。

一つ木から豊川稻荷前、青山御所のあたりでは、葬の通るのは珍らしくはないが、こんなに  
 急ぐ葬は見たことがないので、往來のものが皆立ち留まつて、目迎目送をするのである。人力

車も留まる。自動車も留まる。町家からは勿論、警察署のお役人迄駈け出して来ては、立ち留  
 まつて見るのである。

只電車丈は運轉してゐたが、巡查がなんと思つたかそれも止めてしまった。皇族の通行の外  
 には例のない事である。

速度は次第に加はつて来る。青山の通りから墓地へ曲がる横町の角へ来た頃には、行列は駈  
 足になつてゐる。

此角には、先へ来て待ち受けてゐた會葬者が大分ある。これは角から棺の跡へ附いて行つて、  
 齋場の受附では、山の手から供をしたと見せかけようとする、ずるい連中である。

なんだつてあんなに急いで来るのだらうと、不審に思ひながら待つてゐると、黒い服を着た西  
 洋人が一人先頭に立つてゐる。それが大股にゆつくり歩くやうに見えてゐて、不思議に早い。

すぐ跡を、道の向側に寄つて附いて来る、シルクハットの先生は一しよう懸命に駈けて、やつと  
 西洋人と自分との間に同じ距離を保つてゐる。それから跡は提灯も花も皆駈けて来るのである。

そりや來たと、覺えず一足横町の方へ下がるとき、西洋人を先に立てて、行列は角を曲がら  
 ずに、青山の通を眞直に行き過ぎる。丸で旋風の吹いて通るやうで、見てゐるのが目まぐるし



いのである。

いつも此角に立つてゐる巡查が、道を間違へたのだと思つて、一足前へ踏み出して、「もしもし」と云ふ頃には、もう花の列が通り過ぎて、棺が駈けて行く。銘旗も四句の偈の旗も、水平に靡いてゐる。棺のすぐ背後を、女が一人附いて駈ける。東髪がほどけて、入毛と一しよに、これも旗と同じやうに、水平に靡いてゐる。圓く太つた太股の程まで出して駈けるのである。早いわ早いわ。あれ、車が、空車がと思ふ暇もない。一番跡に附いて行く軍人の乗つた馬は、galopでこそなけれ、hot stepを踏んでゐる。馬の尻尾は、馬場先に据ゑてある楠公の銅像の馬と同じで、これも水平に靡いてゐる。

角に立つてゐた連中は、皆口を大きく開いて、茫然として見送つてゐたが、稍暫くしてから、慌てたやうに、一度に物を言ひ出した。

「どうしたと云ふのだらう。」

「嘘のやうぢやないか。」

「馬鹿げてゐるぢやないか。」

「只事ぢやあございませぬ。魔がさしたのぢやあございませぬか。」これは明治の初年に小

説を書いたことのある爺いさんの、生き残つてゐるのが云つたのである。

「早く警察へ届けよ。」

「軍隊を出して貰はうか。」

がや／＼云つてゐる最中に、三一會堂でする儀式の爲めに打つ號砲の音が、微かに聞え始める。一同本當に我に返つて、齋場へ行つて、先發の連中や、茶屋に休んでゐた會葬者と相談して、警察署へ届けに行くと、それより先に巡查が見たまゝを報告してゐたので、先々の駐屯所へ電話を掛けてゐる所であつた。

電話はそれ／＼通じたが、駐屯所にゐる一人か二人の巡查には、手の付けやうがなかつた。行列は其日の暮方に多摩川の岸で止まつた。ドラナチュウルと名告つた西洋人を始として、跡の三人もどこへ行つたか、更に知れない。責めても手掛かりと、シルクハットの先生がポケットにあつた名刺を出して見ると、これ丈は慥かに残つてゐた。併し不思議な事には、ドラナチュウルと書いてあつた筈の、一枚の名刺がなくて、其代りに見覚えのない一枚の名刺がある。その文字は Dr. Diabolus としてあつた。警視廳へ名刺が上がつて、どこの印刷所で印刷したかと、色々に取調べられたが、とう／＼知れずじまつたさうである。



最も喜ばしいのは、非常な駈足をした大勢が至極達者で、一同めでたく東京へ引き返した事である。

最も最も喜ばしいのは、亡くなつたと思つた先生が棺の中で蘇生して暴れ出されたのを、一同が助け出した事である。

文壇萬歳萬々歳。

—了—

印刷所 東京市小石川區西戸川町 電話 石川五九二番	◀ 滴 涓 ▶	
	大正十二年四月一日印刷 大正十二年四月七日發行 (定價五拾五錢)	著者 森林太郎 發行者 東京市牛込區矢來町三番地 佐藤義亮
富士印刷株式會社 印刷者 佐々木俊一	發行所 東京市牛込區矢來町三番地 <b>新 潮 社</b> 電話牛込 八八八八 〇〇〇〇 九八七六 番番番番 番二四七一(京東)替振	



■ 書叢本脚代現 ■

- (1) 未能力者の仲間 (附) AとB。或日の出来事其他 武者小路實篤氏著
- (2) 飢 渴 (附) 大蝶の死。大雪の夜。 長田 秀雄氏著
- (3) 法成寺物語 (附) 春の海邊。十五夜物語。 谷崎潤一郎氏著
- (4) 髑 髏 舞 (附) 葡萄棚。犬。小しんと馬。 吉 井 勇氏著
- (5) 阪崎出羽守 (附) 嬰兒殺し。流見藏。穴。 山本 有三氏著
- (6) 雨 空 (附) 雪。五月盡。暮れがた。 久保田万太郎氏著
- (7) 秦 の 始 皇 (附) 芭蕉。遊女。義隆最後。 灰野 庄平氏著
- (8) 七 年 の 後 (附) 夜の一場。清盛と常盤。 近藤 經一氏著
- (9) 第 一 の 世 界 (附) 新緑。俊寛。ベテスダの池。 小山内 薫氏著
- (10) 茅 の 屋 根 (附) 玄宗の心持。時勢は移る。 菊 池 寛氏著
- (11) 次郎吉懺悔 (附) 或る時代。谷底。其他。 鈴木泉三郎氏著

◆ 送料一冊一價 ◆ 各冊約二百四十頁 ◆

■ 書叢說小篇中 ■

— 說小篇中の後前枚百二くゆを間の篇長と篇短 —

- (第一編) 潮 風 里 見 淳氏著
- (第二編) 剪られた花 佐藤 春夫氏著
- (第三編) 世の中へ 加能作次郎氏著
- (第四編) 明暗の街 谷崎 精二氏著
- (第五編) 走馬 燈 室生 犀星氏著
- (第六編) 二人の彼 武者小路實篤氏著
- (第七編) 露 芝 久保田万太郎氏著
- (第八編) 山 戀 ひ 宇野 浩二氏著
- (第九編) 破 婚 ま て 宮地 嘉六氏著
- (第十編) 野ざらし 豊嶋與志雄氏著
- (第十一編) 存 生 細田 源吉氏著

◆ 送料六錢 ◆ 價七錢宛 ◆ 六百六十頁 ◆ 四版



代表的

# 名作選集

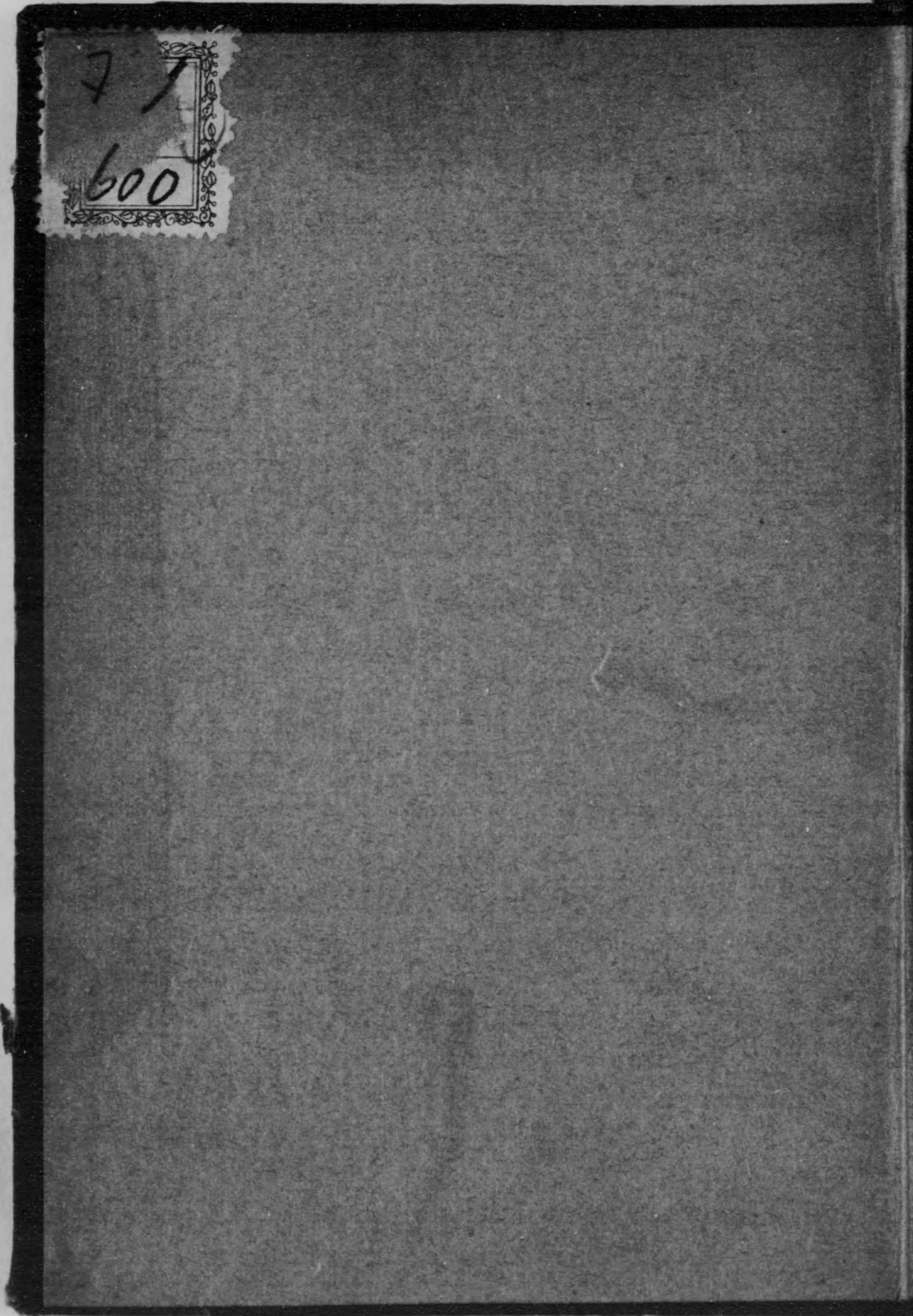
明治大正の傑作全集  
定價は破天荒の至廉  
賣高既に百七十萬部

▼▼▼  
羽二重表紙  
一冊五拾五錢  
送料一冊六錢

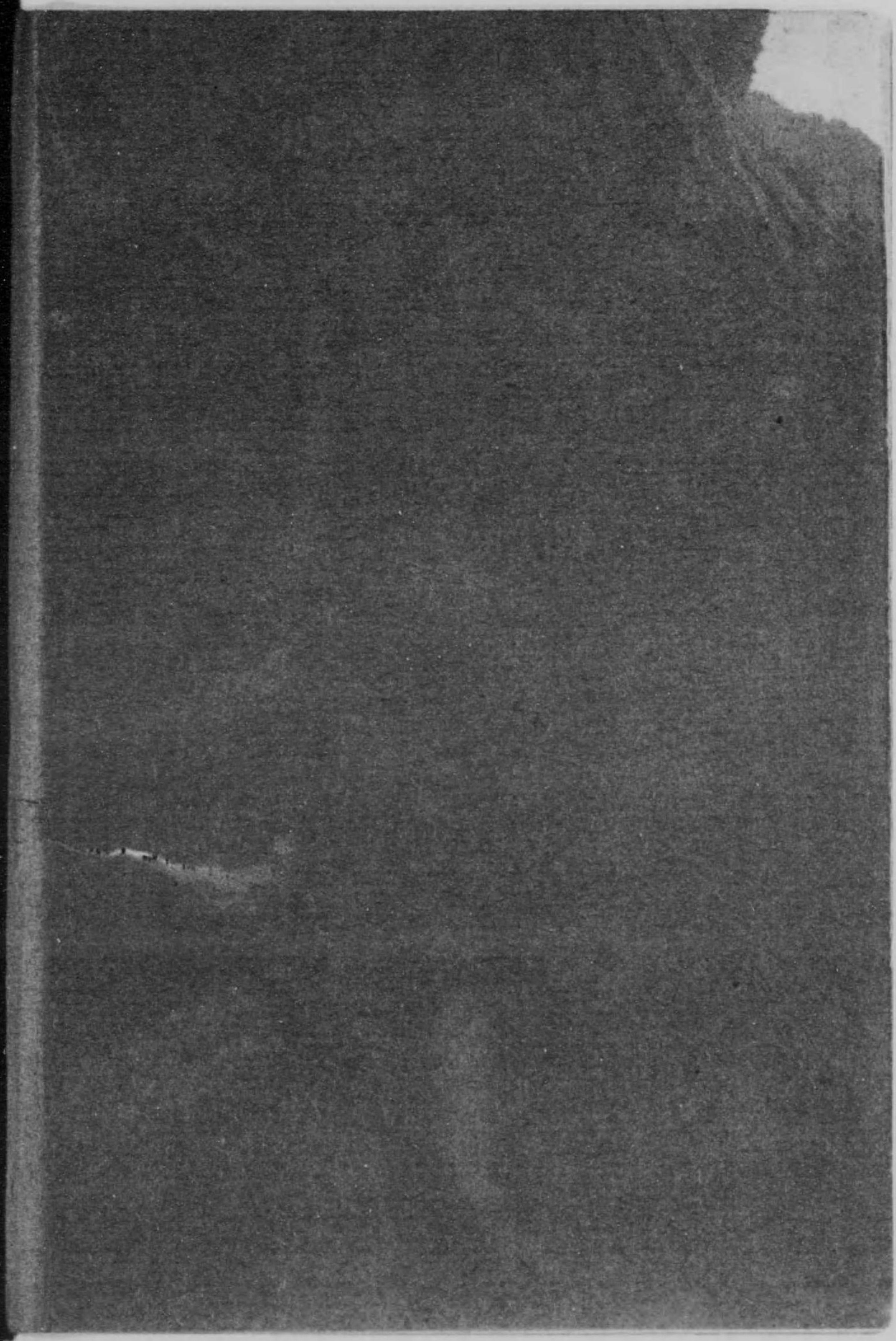
第一 牛肉と馬鈴薯 獨歩	第十三 耽	濁泡鳴	廿五 物言はぬ顔 未明
第二 坊っちゃん 漱石	第十四 明治詩歌選 六家	廿六 ふところ日記 眉山	
第三 蒲 團花袋	第十五 戀ざめ 風葉	廿七 體の皮 小劍	
第四 透谷選集 透谷	第十六 別れた妻 秋江	廿八 女役者 俊子	
第五 春 (上) 藤村	第十七 は 姿天外	廿九 南小泉村 青果	
第六 春 (下) 藤村	第十八 お艶殺し 酒二郎	三十 少年 行星湖	
第七 わが袖の記 樽牛	第十九 俳諧 師 虛子	卅一 啄木選集 啄木	
第八 爛 れ 秋聲	第二十 煤煙 (上) 草平	卅二 運命の丘 抱月	
第九 平 凡 四迷	廿一 煤煙 (下) 草平	卅三 和 解直哉	
第十 高野 聖鏡花	廿二 子規 枕子規	卅四 末 枯万太郎	
第十一 何處へ 白鳥	廿三 そ の 妹 實篤	卅五 善心惡心 里見壽	
第十二 今戸心中 柳浪	廿四 旅 役者 幹彦	卅六 俊 寬素池寬	

五十七編 芥川龍之介





7  
600





終